平成22年度（2010年度）自治体職員協力交流事業

協力交流研修員　研修報告書

2010 Local Government Officials Training Program in Japan

Trainee Reports

財団法人自治体国際化協会
CLAIR
Council of Local Authorities for International Relations

はじめに

総務省及び（財）自治体国際化協会では海外の自治体等の職員を受け入れることについて、財政面や受入実務面での支援を行うための「自治体職員協力交流事業」を展開しています。

平成 8 年度より創設された自治体職員協力交流事業も平成 22 年度（2010 年度）は 15 年目を迎え、延べ 34 の国と地域から 938 名が本事業に研修員として参加されました。平成 22 年度（2010 年度）においては 7 ヵ国から 31 名の研修員が様々な分野で実り多い研修を行いました。

本事業は「ひとづくり」を通じた国際協力事業の１つでありますが、研修員の皆さんが自治体の有するノウハウ・技術を習得され、帰国後、日本における研修の成果や経験をそれぞれの職場において大いに活かされ、また、自治体間の国際協力・交流の貴重な架け橋として活躍されていると伺っております。

そうした研修員の日本での奮闘ぶり、研修の成果を各方面の方々のご協力のもと、平成 22 年度も報告書として編集することができました。本版からは、全事例でなく、国際交流や技術の習得に加えて、研修員本人のノウハウが自治体の行政施策の実施や問題の解決に貢献している事例等を中心に７事例を選定し、掲載しております。

この報告書が研修員派遣国や今後研修員の受け入れを予定されている各自治体において活用していただけましたら幸いです。

最後に、研修員の受け入れにご尽力されました各受入自治体及び関係機関の皆様方に対して、心よりお礼を申し上げます。

平成 23 年（2011 年）6 月

（財）自治体国際化協会
交流支援部　経済交流課

Foreward

The Local Government Officials Training Program (LGOTP) is a joint initiative of The Ministry of Internal Affairs and Communications and the Council of Local Authorities for International Relations. We provide both financial and practical assistance to invite local government officials from around the world to study in Japan

The LGOTP was established in 1996 and entered its 15th year in 2010. A total of 938 participants from 34 countries and regions have participated on the program since its inception, and in 2010 we welcomed 31 participants from 7 nations who studied a wide range of topics.

One of the main goals of this program is to assist each trainee improve their skill set through absorbing the know-how to be found in Japanese local governments. We hope that each trainee returns to their home local government to apply this knowledge for the improvement of their local community. Of course, the bonds of friendship and cooperation formed between Japanese local governments and their overseas counterparts are another enduring benefit of the program.

The 2010 training report reflects the hard work of the LGOTP trainees, and has been compiled with the cooperation of all involved in the program. Rather than a complete overview of every trainee's work, we have selected a total of seven reports covering topics such as international and technical exchange. There is also a section outlining how individual trainees have assisted their host local governments implement policy and solve pressing issues within Japan.

We hope this booklet proves useful both for the trainees' home countries and for local governments who are considering inviting trainees to Japan.

We extend our deepest gratitude to all local government officials and other individuals whose efforts make this program possible.

June 2011

International Cooperation and Economic Relations Division
Department of International Exchange, Cooperation and Economic Relations
Council of Local Authorities for International Relations

＝平成 22（2010）年度自治体職員協力交流事業スケジュール＝

２０１０年

４月１６日（金）　受入れ自治体担当者会議

東京来日研修

５月２３日（日）　協力交流研修員の来日　　ルポール麹町泊

５月２４日（月）　開会式

オリエンテーション

講話（総務省：国際室　的井室長）

受入れ自治体との面談　　ルポール麹町泊

５月２５日（火）　日本語レベルチェック

都内視察：国会議事堂等　　ルポール麹町泊

５月２６日（水）　東京から滋賀（ＪＩＡＭ）へ移動

ＪＩＡＭ交流会

全国市町村国際文化研修所(JIAM)研修

５月２７日（木）　ＪＩＡＭ開講式

日本語研修　授業：70 分×68 コマ　自習 13 コマ

５月２９日（土）滋賀県内視察（彦根城見学、日野町西田邸炊き出し体験等）

６月　４日（金）地方自治行財政講義(総務省国際室　遠藤係長)

６月１０日（木）所外研修（オムロン株式会社野洲事業所）

６月１１日（金）伝統文化体験(茶道／裏千家淡交会　北野宗道　特別参事)

６月１２日（土）京都市内視察(清水寺、二条城、金閣寺、京都文化博物館等)

６月１５日（火）行政課題講義(大阪府立大学　黒田研二　教授)

６月２２日（火）成果発表会

６月２４日（木）　ＪＩＡＭ閉講式　日本語ステップアップ研修開始

日本語研修　授業：70 分×38 コマ　自習 7 コマ

７月　８日（木）　ＪＩＡＭ日本語ステップアップ研修終了

専門研修

６月２５日（金）　各受入れ自治体における専門研修開始

研修員の帰国

１１月中旬～3月末にかけ順次帰国

＜付録＞全体研修風景

○都内視察＜東京都庁＞

＜国会議事堂＞

○JIAM研修

日 本 語 研 修

滋賀県内視察

地方自治行財政講義

所外研修（オムロン株式会社野洲事業所）

伝統文化体験（茶道）

京都市内視察（京都文化博物館）

行政課題講義

※　平成22（2010）年度自治体職員協力交流事業　事業担当職員名（敬称略）

総務省自治行政局国際室	的井宏樹、遠藤　崇、上田伸也
（財）自治体国際化協会	角田秀夫、森田正典、宮崎照也、広瀬正之、原田圭子、伊藤崇宏、Matt Douglas、Patricia Ikeda、Christian Tsuji
全国市町村国際文化研修所（JIAM）	ﾓｰｱ･ｵｰｽﾃｲﾝ、時　光

平成22年度　自治体職員協力交流事業　協力交流研修員名簿

都道府県	市町村	氏名	性別	国名	所属団体	研修分野（表示用）
北海道	登別市	張　晶	女	中華人民共和国	天津市人民政府外事弁公室	観光
岩手県		馬　雲	女	中華人民共和国	大連市瓦房店市商務局	経済交流
群馬県		ﾙｼﾘｱ･ｸﾞﾗﾝﾄﾞ	女	ブラジル連邦共和国	サンパウロ州タツイ市人事部研修課	カウンセリング
埼玉県		ﾌﾘｱﾝ･ｱﾙﾌｫﾝｿ･ﾁｬﾍﾞｽ･ﾄﾙｴﾊﾞ	男	メキシコ合衆国	メキシコ州政府教育省総合部管理総務課	教育行政
埼玉県	さいたま市	ﾏﾘｵ･ﾈﾌﾀﾘ･ﾁｮｺﾃｺ･ﾍﾙﾅﾝﾃﾞｽ	男	メキシコ合衆国	トルーカ市秘書課	一般行政
千葉県	千葉市	楊　麗	女	中華人民共和国	天津市外商投資服務中心アジア太平洋部	国際経済交流
富山県		安　淑一	女	中華人民共和国	遼寧省疾病予防控制中心	医療
富山県		杜　航	女	中華人民共和国	遼寧省瀋陽市環境保護局皇姑分局	環境
石川県	金沢市	樊　文瓊	女	中華人民共和国	蘇州市蘇州農業職業技術学院	一般行政・国際交流
福井県	敦賀市	朴　泰玉	女	大韓民国	江原道東海市通商協力教育課	文化芸術
山梨県		陳　娟	女	中華人民共和国	四川省四川大学華西医院	看護
岐阜県	高山市	和　復光	男	中華人民共和国	雲南省麗江市旅游局	観光
岐阜県	高山市	和　暁燕	女	中華人民共和国	雲南省麗江市麗江古城保護管理局	文化財保護
岐阜県	安八町	徐　銀鳳	女	中華人民共和国	江西省豊城市小港鎮政府党政弁公室	一般行政
静岡県	浜松市	ﾃﾞｨﾙｾ･ｱﾊﾟﾚｼﾀﾞ･ﾍﾟﾄﾞｳﾝ	女	ブラジル連邦共和国	サンパウロ州オズヴァルド・クルズ市教育部	教育
愛知県	豊橋市	ｱﾝｼﾞｪﾗ･ﾀﾞ･ｼﾙｳﾞｧ･ﾋﾟｺﾘ	女	ブラジル連邦共和国	パラナヴァイ市サンタ・テレジンハ公立学校	教育
京都府		李　文琦	女	中華人民共和国	陝西省西北政法大学	環境保護
鳥取県		林　暁琳	女	中華人民共和国	吉林省図們市経済技術合作局	経済協力
鳥取県		金　蘭姫	女	大韓民国	江原道襄陽郡襄陽邑事務所	商工行政
島根県	松江市	王　軍	男	中華人民共和国	寧夏回族自治区銀川市第一病院外科	医療
島根県	松江市	許　楓	男	中華人民共和国	吉林省吉林市人民政府外事弁公室	国際交流
山口県		賈　維沙	女	中華人民共和国	山東省国際旅游開発中心	観光交流
愛媛県	松山市	鄭　淑	女	大韓民国	京畿道平澤市安仲出張所税務課	税務
高知県		エドゥアルド・アンテロ・ソリス	男	フィリピン共和国	ベンゲット州土木部	土木
高知県	高知市	周　鋒	男	中華人民共和国	安徽省蕪湖市人民政府外事僑務弁公室	一般行政
福岡県	北九州市	姜　閏淑	女	大韓民国	仁川広域市消防安全本部消防行政課	消防行政
福岡県	北九州市	ドゥ・クアン・ミン	男	ベトナム社会主義共和国	ハイフォン市外交部友好・NGO課	国際交流
福岡県	北九州市	史　磊	男	中華人民共和国	大連市環境保護局科技標準（国際協力）処	環境保護
福岡県	北九州市	マナシャン・マリア	女	ロシア連邦	チェリャビンスク州ワールドトレードセンター	貿易振興
佐賀県	佐賀市	楊　建新	男	中華人民共和国	江蘇省連雲港市連雲港職業技術学院外国語学院	教育
熊本県	芦北町	李　智惠	女	大韓民国	京畿道始興市車輛管理事業所	一般行政

目　次

1. 登別市の観光行政を学んで …… 張　晶（登別市）　1
登別市 「平成22年度自治体職員協力交流事業について」 …… 4
2. カウンセリング研修プログラム …… Lucilia Grando（群馬県）　5
群馬県 「外国籍生徒・保護者の心理カウンセリング」 …… 11
3. 富士の国　山梨での看護研修 …… 陳　娟（山梨県）　13
山梨県 「看護師研修を受け入れて」 …… 16
4.「シェシェ、タカヤマ」 …… 和　復光（高山市）　18
高山市 「友好都市中国雲南省麗江市から研修員を受け入れて」 …… 24
5. 新たな教育交流へ　～子どもの笑顔を橋渡し～ …… Angela da Silva Picoli(豊橋市)　26
豊橋市 「教育交流都市ブラジルパラナヴァイ市から研修員を受け入れて」 …… 32
6. 日本の商工行政を学んで …… 金　蘭姫（鳥取県）　34
鳥取県 「自治体職員協力交流研修員を受け入れて」 …… 37
7. 北九州市での国際関係研修コースに参加して …… Do Quang Minh（北九州市）　39
北九州市 「平成 22 年度　北九州市自治体職員協力交流事業について」 …… 45

登別市の観光行政を学んで

受入自治体：北海道登別市
氏　　名：張　晶
出　身　国：中華人民共和国
研　修　先：登別市役所

1．はじめに：

私は天津市人民政府外事弁公室に勤務し、国際交流の推進に関する仕事を担当している。大学で四年間日本語を勉強して、２００７年から今の仕事に従事してきた。しかし、実際の仕事の中で、自分の語学力の不足や日本に対する理解の不十分さを痛感し、これからは中日双方の友好関係をさらに推進して、お互いの理解を一層深めることが私たちの役目だとしみじみ感じた。

今回、私は平成２２年度自治体職員協力交流事業の研修員として日本にくるチャンスをいただいた。私は今まで日本を何度も訪問したことがあるが、北海道は初めてだ。観光資源が豊富で、優れた自然に恵まれた観光名所の北海道及び湯の国と呼ばれる登別市において、ここの観光行政はどのような実態なのか、どういうふうに運営しているかなどについて自分の目で見、体験し、研修生活を通じて、日本の伝統文化や観光現状をしっかりと学び、日本への理解を一層深めたい。

２．研修概要：

（1）全体研修（5月２３日から6月２３日まで）

５月２３日、私たち協力交流研修員は各国から日本に到着し、研修生活が本格的に始まった。５月２４日から２５日まで東京で研修して、開会式、オリエンテーション、日本語のレベルチェックなどを行った。都内視察では国会議事堂と参議院などを含む日本の代表的な施設を見学させてもらった。

５月２６日から６月２３日まで約１ヶ月間、滋賀県の全国市町村国際文化研修所（ＪＩＡＭ）で日本語の研修を受けた。日本語の勉強をはじめ、日本地方自治講義、行政課題講義、日本の伝統文化や礼儀などについてさまざまな知識を学んだ。さらに、ジャスコ、オムロン工場を視察し、周辺の京都、奈良、彦根城などの観光名所を見物するなどして、大変勉強になった。研修の最終日に、成果発表会の舞台で、私たち研修員は１ヶ月間苦労して身につけた日本語の知識を利用してプレゼンテーションを見事に行って見せ、好評を博した。

（2）専門研修（6月２４日から１１月１６日まで）

６月２４日に登別市に着任して、約５ヶ月にわたる専門研修が始まった。

①　一般行政研修

はじめの一ヶ月間、私は登別市役所で一般行政研修を受けた。毎日、市役所各セクション（総務部、市民生活部、保健福祉部、観光経済部、都市整備部、教育委員会、議会事務局、消防などが含まれる）の担当者からそれぞれの行政課題とその取り組みについて詳しく説明してもらった。また、市内の小学校や幼稚園、市民会館、市民活動センター、市民プール、クリンクルセンター（ごみ処理施設）、老人福祉センターなど関係施設も見学し、市の行政情報について全般的に把握することができた。特に消防研修の中で、消防士の専

用服を着用し、梯子に乗せてもらって、高いところまで運ばれた経験が深く印象に残った。

②　観光行政研修

７月２６日、登別温泉町に位置する観光振興グループに移動して、観光行政研修が始まった。

実務研修：毎日、観光振興グループの一員として、同僚と同じように実務の仕事をしていた。時には、登別市と隣の白老町がともに行った観光連絡協議会に参加した。会議の目的は、登別市と白老町の観光の更なる振興に資し、両市町の観光資源や施設、産業の関連を深め、当地域の個性を生かした多様な観光地作りを推進することにあるのだ。また、登別洞爺広域観光圏が主催する中国人誘客戦略検討会にも出席して、関係者と率直な意見を交わした。さらに、登別伊達時代村、登別グランドホテルと登別マリンパークで実務研修を行った。観光施設とホテルの現場に身を置いて、各国からの観光客と直接に接触しているうちに、観光研修の本旨が深く吟味できるような気がした。

登別伊達時代村にて

視察研修：今度の研修課題に合わせて、登別市の温泉街、地獄谷、大正地獄、奥の湯、日和山、大湯沼天然足湯、登別マリンパーク、登別伊達時代村、クッタラ湖やオロフレ峠などさまざまな観光名所を視察して、登別市の観光資源の魅力に深い感銘を受けた。

祭の参与：日本全国において、伝統的な祭りだけではなく、各地方では地元の特徴に合わせた独自の行事も行われている。今年は登別市市制施行４０周年という節目を迎え、豊水まつり、元鬼まつり、地獄まつり、刈田神社祭典、漁港まつりなどの伝統祭りを盛大に催し、また、盆踊り、クッタラ湖灯篭流しや地獄谷での鬼花火などの催しも行われた。日本の伝統文化と地元の風俗を身近に体得できた。その中で、８月に行われた地獄まつりは登別市の一番重要な伝統の祭りで、毎年何万人以上の参加者をひきつける盛大な地元まつりと言われる。祭りの日、私はスタッフの一員として、お昼から祭りの準備作業に参加し始め、忙しくて楽しかった。日本の祭りは主に民間からなる実行委員会が運営するというわけで、一般の市民を始めとする多くの人々から協力を得て、市民の参加意欲を高める一方、市政に大きな負担をかけずに済むと感じた。

③　道内、道外研修視察

観光研修の重要な一環として、北海道内外研修視察を行った。道内研修では、札幌の現代化に溢れた町、小樽のきれいな運河、富良野のラベンダー、有名な旭山動物園、そして函館の夜景などを見物して、北海道観光の魅力を再び感じさせてもらった。道外研修では、東京と千葉に行って、日本の一番繁栄な町に身をおいて、北海道の観光資源とは異なった点を味わうことができた。

中華料理教室にて

④　その他

研修の中で、中国語講座、中華料理教室や国際文化講座なども実施された。中国語講座では定期的に市役所の職員たちを対象に簡単な挨拶と基本的な文法知識を教えた。６回しか行わなかったが、職員たちが興味津々と積極的に参加してくれた。また、学生や一般市民に向けて、中国及び天津市の紹介を通

じて、皆さんに中国を深く理解してもらった。中華料理教室では市民の皆さんと一緒に水餃子を作って、雰囲気が盛り上がった。また、７月に中国広州市からの代表団の接待仕事に関わり、歓迎レセプションの通訳などを任せられた。

（３）課題と結論

登別市は登別温泉とカルルス温泉を抱える北海道有数の観光都市である。湧き出る湯量は豊富で一日１万トン、９種類の泉質を有し、温泉のデパートとも呼ばれている。温泉だけではなく、地獄谷、大正地獄、日和山というさまざまな観光名所を持つため、世界中の観光客を魅了している。今回の研修を通じて、観光を基幹産業とする登別市の観光方針、運営方法及び観光業への取り組みなどを深く理解できた。わが国は観光を国の重要産業として位置づけ、これから更なる振興を図ることが大きな課題になると思う。しかし、両国の観光業の現状を比較してみれば、相違が幾つか見つかった。

①　中国は数多くの観光スポットそれぞれに力を入れているのに対して、日本は当地域の観光資源を全体的に考えることが好きだ。例えば、温泉観光地にあるホテルに泊まったら、日本伝統的な和室や温泉を楽しむとともに、本場の日本料理も食べられる。また、周りにはさまざまな観光名所があり、散策し見物できるように工夫している。夜になると、花火などを楽しんだ後、ホテルに戻ってくる途中で、商店街を歩き買い物をするのも観光の楽しみの一つである。

②　中国の場合、観光ガイドの資格の取得は国家試験となっており、資格と等級に分けられている。それに対して、日本には同様の試験制度はないが、一部の有料ガイドのほかにボランティアのガイドも多いという。また、中国の試験の中で、観光に関する専門知識や外国語の試験も含まれ、プロのガイドになるために、比較的正式な訓練を受ける必要がある。

③　現在、中国は国内の観光客を重点として努めてきたのに対し、日本は中国人、韓国人など外国人観光客の受入をますます重要視して、色々工夫しているところだ。例えば、外国語が話せる係員を駅や店などに配置したり、外国語の観光パンフレットを観光案内所やホテルに置いていたり、百貨店や飲食店の営業時間をある程度延長したりするようになってきた。

中国と日本とは同じアジアにおける隣国であり、またそれぞれに独特な観光資源を持っている観光国でもある。最近、中国人観光客向けの個人観光ビザ発給緩和などにより、今後日本では中国人観光客の更なる増加が期待されていると思う。

３．終わりに：

時間が経つのは早いものだ。あっという間に、６ヶ月の充実した研修生活はいよいよ終わりを迎える。短い研修期間だが大きな収穫があり、私にとって、人生の貴重な思い出になり、これからも大切にしたいと思う。

近年来、中日両国の友好交流と経済関係がますます緊密化されてきて、各分野の交流事業も盛んに行われている。しかし、現在両国はお互いの理解の不十分なところも、交流や連携の足りない部分もあると実感した。これから、両国は自分の長所を最大に生かし、短所を補い合い、中日双方の相互理解を一層深めるように努力していくべきなのではないかと考えている。それに、私は研修で身につけた知識と経験を職場でうまく生かして、微力ながら、橋渡しとして引き続き努めていきたいと思う。

最後に、今度の事業にご尽力いただいた日本総務省、CLAIR、JIAM の皆様、また登別市小笠原市長をはじめとする市役所の職員の方々、観光協会の皆様、熱心な市民の皆様に対して、深く感謝の意を申し上げたいと思う。また再会できる日を楽しみにしている。

「平成２２年度自治体職員協力交流事業について」

自　治　体　名：北海道登別市
研　修　員　名：張　晶
派遣元自治体：中華人民共和国　天津市
研　修　分　野：観光
研　修　期　間：６ヶ月
主な研修部署：観光経済部観光振興グループ

１．背景・目的

登別市は、平成９年度より本事業を開始し、これまで中国、韓国、モンゴル、デンマークから 13 名の協力交流研修員の受入を行っている。協力交流研修員の受入により、諸外国の地方行政への貢献という国際協力が図られるとともに、当市は国内有数の観光都市で、東アジア、東南アジアをターゲットに観光誘客を進めており、協力交流研修員を通じて観光をＰＲすることも目的の一つとしている。

２．研修内容

6 月 25 日～7 月 16 日までは､各グループの講師による一般行政研修を行った。

7 月 26 日～10 月 13 日までは、観光振興グループにおいて観光行政の研修を行ったほか、ホテルやテーマパークでの実務研修、観光イベントや隣町の白老町との観光連絡協議会、登別洞爺広域観光圏が主催する中国人誘客戦略検討会に出席し、関係者と意見交換を行うなどした。

登別温泉の地獄祭りに天女役に扮して参加

３．事業実施にあたっての工夫、苦労したこと

日本に来る以前から研修員と連絡を取り合い、当市の情報や研修計画案の調整、出身市紹介の資料つくり等を依頼した。その結果、スムーズに研修に取り組めたほか、国際理解講座において、出身市の概要や食文化についてとても丁寧に紹介することができた。

当市には、本事業の積み重ねによりできた「研修員のサポーター」がおり、休日はサポーターが市内外を案内するなど研修以外の部分も充実していた。

国際理解講座に出身市の天津市を紹介

４．成果・課題

今年度の研修員は、日本語が非常に堪能で、コミュニケーションが図られた。職員から受ける一般行政の研修も密度の濃い研修を行うことができた。また、市民とも親しく交流し充実した滞在になった。研修員が帰国の際には「ふるさと大使」に任命し、本市との交流の架け橋になってもらっている。本事業を通し海外の自治体職員とのネットワークを築くとともに、当市としての国際協力を果していきたい。

Counseling Training Program

Host Institution: Gunma Prefecture
Name: Lucilia Grando
Country: Federative Republic of Brazil

Training Institution: Brazilian School、

Public elementary school

This report talk about the Counseling activities developed during the LOGTPJ-2010, from July to December, in Oizumi and Ota towns of Gunma Prefecture.

The Counseling Training had the purpose of provide psychological assistance for Brazilian students in Brazilian and Japanese Schools.

1 Reasons for applying

The application for this program was made because coming to Japan and learn about Japanese life and culture in locus would be the best way to understand the specific problems and difficulties faced by Brazilian children that live in Japan. Identifying whether these problems are arising from the child, family structure or cultural differences would become easier to help them.

2 Summary of Training

The first step was to do a research to detect the main problems of students in Brazilian Schools. Four Brazilian Schools participated in this research: Gente Miúda, Paralelo, Pitágoras and Nipakku, which together had 549 students. It was observed the following results in the frame bellow:

Psycho Pedagogical Problems	**Total**	**Emotional Problems**	**Total**
Do not complete the tasks	107(19%)	Lack of Interest	50(0.09%)
Lack of Attention	101(18%)	Agressiviness	24(0.04%)
Difficulty of Memorization	94(17%)	Tics	22(0.04%)
Difficulty of Writing and Reading	85(15%)	Nail Biting	17(0.03%)
Difficulty of Concentration	07(0.01%)	Crying	17(0.03%)
Difficulty of Talk	02(0.001%)	Others	16(0.02%)
		Isolation	10(0.01%)
		Atypical Sexual Behavior	07(0.01%)
		Phobia	01(0.001%)

After these survey, it was started to do Psycho diagnose of cases more urgent in those four Brazilian Schools and Asahi Elementary School, a Japanese School. The attendances were realized weekly in these 05 schools, one day of week per each school. It was made 367 attendances: 42 students were assisted (20 children from 05 to 11 years

old and 22 adolescents from 12 to 17 years old); 25 parents received orientation about their children and 82 adolescents received Professional Orientation.

Major psychological problems diagnosed were:

Cases	Number	Cases	Number
Attention deficit	07	Japanese language Difficulty/stress	02
Traumas/fears/insecurity	07	Adaptation difficulty	02
Hyperactivity	05	Atypical sexual behavior	01
Family problems	05	Autism characteristic	01
Depress characteristics	05	Multiple deficiency	01
Anxiety disorder/stress	03	Depression and self injury	01
Historical domestic violence	02	Problems of adolescence	01

From these attended cases, it was made 11 referrals: 08 to neurologist, 02 psychiatric and 01 to pediatrician.

Thinking to help the students to improve the capacity of concentration, memorization and reasoning, it was developed a research with 64 students of Paralelo School to verify if the Mentalphysical Exercise and Super Brain Yoga could help them improve their capacities (picture 01). These exercises combine physical activities with breathing exercises, which in turn causes higher oxygen in the body and head stimulating the brain activities.

Picture 01
Students of Paralelo School making Mentalphysical Exercises and Super Brain Yoga, on September 2010.

These exercises were applied every day at school before classes. A battery of tests was applied to the students before they begin the exercises in July, and in December they were retested again. Five tests were applied to investigate the following capacities: perception, concentrated attention, auditory memory, visual memory and logical reasoning. It was possible to see the result as follows: all students improved their scores at least in 01 test; 29% of students improved their scores in all tests, 30% improved in 03 tests, 30% improved in 02 tests and 11% improved in 01 test. In the test of Concentrated Attention, 37% of students improved their scores from 21% to 40%. So, it was certified that Mentalphysical Exercises and Super Brain Yoga can help students improve their capacities and skills. However, more research with a greater scientific rigor and control of variables is necessary.

Lectures and role-play about Professional Orientation and Career Choice were developed for the students of Asahi Junior High School and for the students of Gente Miúda School.(picture 02) A questionnaire was applied to see their expectation and

concerns about future, career, living in Japan and living in Brazil. The data are still being processed and analyzed.

Picture 02
Role-play about Choices in Life with students of Asahi Junior School, on 11/15/2010.

Orientations were also developed for parents with the aim of help them to understand the emotional and psychological aspects of development of children and adolescents (Picture 03). These orientations were realized at Asahi Elementary School and Minami Junior High School.

Picture 03
Orientations about Emotional Development of Child for the parents of Brazilian students of Asahi Elementary School, on 11/26/2010.

The trainee also has received information about the practical and public policies of Gunma Prefecture to prevent domestic violence, abuse and violence against children, visiting the Health and Social Welfare Center of Tobu, in Ota town.

Cultural activities have also been provided as a way of understand better the Japanese life, tradition and customs, visiting places such as: Shorinzan Darumaji, Daimon-ya, Tambara Lavander Park, Temples and Shrines, Parks, Myogi Mount, Sakura Mount, trekking and participation in Festivals.

The training is being very beneficial, because the interchange of experience and knowledge of both parts is promoting a better understanding of the needs of Brazilian children that live in Japan and their needs when they return to Brazil.

3 Plans upon returning home

To end this report, it is important to say that all activities, all the emotions felt and lived, all misunderstand of language, every moment and situation was worth in Japan. These experiences form the basis for the establishment of practices in local government that support children adapt to return to Brazil, through visits, role-play, orientations, or a simple conversation.

カウンセリング研修プログラム

受入自治体　　**群馬県**
氏名　　**ルシリア　グランド（Lucilia　Grando）**
出身国　　**ブラジル**
研修先　　**ブラジル人学校 公立小学校**

2010 年自治体職員協力交流事業（LGOTPJ）の研修として、7 月から 12 月まで群馬県の大泉町と太田市でのカウンセリング活動に参加しました。これについて報告いたします。

カウンセリング研修の目的は、ブラジル人学校と日本の小学校でブラジル人の生徒に心理面のサポートをすることでした。

1　本事業に応募した動機

このプログラムに応募したのは、日本を訪れ、日本人の生活と文化を現地で学ぶことが、日本で暮らすブラジル人の子供たちが直面している特有の問題と困難を理解する最善の方法だろうと考えたためです。それらの問題が、その子供自身から生じているのか、家族構成から生じているのか、あるいは、文化の違いから生じているのかを識別することが、彼らを助けるのに役立つと考えます。

2　研修の概要

最初の段階は、ブラジル人学校における主な問題を見つけるための調査だった。この調査に参加したブラジル人学校は次の４校：Gente Miúda、Paralelo、Pitágoras、Nippaku。これら４校全体の生徒数は549名。下の表に示す結果が観察された。

心理教育学的問題	合計	感情面の問題	合計
課題を終了できない	107(19%)	興味不足	50(0.09%)
注意力に欠ける	101(18%)	攻撃性	24(0.04%)
記憶するのが困難	94(17%)	チック	22(0.04%)
読み・書きが困難	85(15%)	爪をかむ	17(0.03%)
集中するのが困難	07(0.01%)	泣き叫ぶ	17(0.03%)
話すのが困難	02(0.001%)	その他	16(0.02%)
		孤立	10(0.01%)
		通常と異なる性的行動	07(0.01%)
		恐怖症	01(0.001%)

この調査の後、これら４つのブラジル人学校と日本人の学校１校（旭小学校）において、より急を要するケースの心理学的診断にとりかかった。５校すべてにおいて１週間に１回、生徒に付き添って観察した（合計 367 回の付き添い）。42 名の生徒（5 才から 12

才の子供 20 名と、12 才から 17 才の若者 22 名）に付き添い、25 名の親が子供に関するオリエンテーションを受け、82 名の若者が職業に関するオリエンテーションを受けた。

診断された主な心理的問題

症例	人数	症例	人数
注意欠陥	7	日本語能力不足、ストレス	2
トラウマ、恐怖感、不安感	7	適応困難	2
多動	5	通常と異なる性的行動	1
家庭問題	5	自閉的傾向	1
うつ的特徴	5	複合的な欠陥	1
不安障害、ストレス	3	うつ、自傷	1
過去の家庭内暴力	2	思春期の問題	1

付き添い観察を行った上記のケースのうち合計 11 名については、8 名を神経科医、2 名を精神科医、1 名を小児科医にまわした。

生徒が集中力、記憶力、論理的思考力を高めるのを助けるために、Paralelo School の 64 名の生徒に関する調査を行い、メンタルフィジカル・エクササイズ（心身を鍛える体操）とスーパーブレインヨガが彼らの能力の向上に役立つかどうかを検証した（写真１）。身体的な運動と呼吸運動を組み合わせたこの体操は、体内と脳内の酸素量を増やし、脳の活動を刺激する。

写真 1
メンタルフィジカル・エクササイズとスーパーブレインヨガを行う Paralelo School 生徒（2010 年 9

この体操は授業前に毎日取り入れられた。体操を始める前の７月に生徒に一連の試験を実施し、12 月に再試験を行った。認識力、集中力、聴覚的記憶力、視覚的記憶力、理論的推論能力を調べるために５つの試験を実施した。
結果は次のとおりであった。

- 全生徒：少なくとも１つの試験の点数が上がった。
- すべての試験の点数が上がった生徒：29%
- 3 つの試験の点数が上がった生徒：30%
- 2 つの試験の点数が上がった生徒：30%
- 1 つの試験の点数が上がった生徒：11%

集中力の試験では、37% の生徒が点数を 21%から 40%上げた。そのため、メンタルフィジカルエクササイズとスーパーブレインヨガが生徒の能力とスキルを上げるのに役立つことが証明された。しかしながら、科学的により厳密で、変動をコントロールしたさらなる調査が必要である。

旭中学校の生徒と Gente Miúda School の生徒のために、職業に関するオリエンテーションと職業選択についてのレクチャーとロールプレイを実施した（写真 2）。将来のこと、職業、日本での生活、ブラジルでの生活についての期待と意見を知るためのアンケート調査を実施した。現在、その回答データの処理と分析が行われている。

写真 2
旭中学の生徒と「人生における選択」についてのロールプレイ（2010 年 11 月 15 日）

また、親が子供や若者の感情面、心理面の発達を理解するのを助けるために父母向けのオリエンテーションを実施した（写真 3）。 このオリエンテーションは旭小学校と南中学校で実施された。

写真 3
旭小学校のブラジル人の生徒の父母を対象とした「子供の感情面の発達についてのオリエンテーション」（2010 年 11 月 26 日）

研修生はまた、太田市の Health and Social Welfare Center of Tobu（東部保健福祉事務所）を訪れ、子供に対する家庭内暴力、虐待その他の暴力を防ぐために実施している群馬県の公共政策に関する情報を得た。

日本の生活、伝統、文化についての理解を深める方法として文化活動も準備されていて、少林山達磨寺、大門屋、たんばらラベンダーパーク、寺院、人社、公園、妙義山、桜山などを訪れたり、トレッキングやお祭りに参加したりした。

この研修はとても有意義であった。それは、日本とブラジルの両方の体験と知識の交換が、日本に住むブラジル人の子供たちのニーズと、彼らがブラジルに戻った際のニーズについてより深く理解するのに役立ったためである。

3　帰国後の展望

レポートの最後にあたり、日本でのすべての活動、味わったすべての感情、言語の誤解すべて、あらゆる瞬間と状況が有益であったことをぜひ述べておきたい。 こうした体験は、参観、ロールプレイ、オリエンテーション、何気ない会話などを通して、子供たちがブラジルに帰国し、適応するのを助ける地方自治体の取り組みを定着させるベースとなる。

「　外国籍生徒・保護者の心理カウンセリング　」

自 治 体 名　　群馬県
研 修 員 名　　ルシリア　グランド
出　身　国　　ブラジル連邦共和国
研 修 分 野　　日系人に対する心理カウンセリング
研 修 期 間　　10ヶ月
主な研修先　　外国人学校、公立小中学校

１　背景・目的

群馬県には、東毛地域を中心に、南米日系人の定住化、集住化が進展し、生活習慣等の違いから地域社会に大きな影響を与えてきている。

また、農山村地域においても、農業研修生として、あるいは日本人の配偶者等として外国人の受け入れは確実に進んでいる。したがって、今後は国籍や民族等の異なる人々がともに生きる地域社会の形成に、自治体の課題として取り組んでいくことが求められている。

県は、外国人住民は県民であるという認識のもとに、これまで様々な課題に直面する市町村をはじめ関係団体と連携し、多文化共生の推進に努めてきた。

平成１６年「外国人と共生するまちづくりプロジェクト」を設置し、多文化共生に向けて今後の施策のあり方について検討を行い、その結果、平成１７年に全国に先駆けて「多文化共生支援室」を設置した。平成１９年に指針を策定し取り組んできたが、平成２１年の経済不況により、外国人労働者も影響を受け、外国籍生徒の就学にも影響が出ており、心理的な問題が顕在化した。

これらのことから、外国人学校に通う生徒及び保護者に対し、母語による心理カウンセリングが必要となり、ブラジルから心理カウンセラーを研修員として受け入れるこになった。この事業では心理的問題を把握し、心理的支援の技術を修得し、母語による効果や需要、課題を研究し、帰国後も日系社会の発展に貢献することを目的としている。

２　事業実施にあたっての工夫、苦労したこと

集住地域の外国人学校に対し説明会を行い、母語によるカウンセリングを必要とする学校を研修員が訪問し、生徒･保護者にカウンセリングを行った。また、公立小中学校からも外国籍生徒のカウンセリングの依頼があったため対応したほか、保護者・教員に対してオリエンテーションを行い、学校をはじめ関係者とも連携をとり、生徒支援につなげた。

その他、日本の精神科医、臨床心理士を訪問し、心理学についてブラジルと日本の違いも確認した。

研修内容が生徒・保護者とのカウンセリングのため、日程の調整等は研修員と学校に任せた。

母語によるカウンセリングのため、日本語を使う機会はないが、生活上の諸手続きや、日本人との研修、連絡の際には、通訳が必要となった。

外国人学校への説明会

3　成果・課題

この事業によりデカセギ日系人を取り巻く環境による心理学的問題を把握することができた。

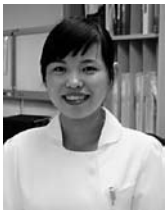
母語によるカウンセリングということで、学校、生徒、保護者からは信頼され、カウンセリングへの協力も得られたため、大変効果的であった。しかしその反面、需要（件数）が多すぎ、研修員の負担となってしまった。

また、マスコミにも研修員の活動が取り上げられ、外国人学校、公立学校でのカウンセリングの様子や、研修員、保護者へのインタビューなど取材を受けた。放送後、静岡県内の外国人学校から要請があったが、研修員のスケジュールが合わず対応できなかった。

母語によるカウンセリングがとても効果的であることが確認できたため、今後は研修員の負担にならないスケジュールを組む必要がある。今後、集住地域の市町にこのカウンセリングの需要と成果を報告し、この事業を市町が直接受入れ積極的に活用してもらうよう説明していきたい。

カウンセリングの様子

富士の国　山梨での看護研修



受入自治体：山梨県
氏　　名：陳　娟
出　身　国：中華人民共和国
研　修　先：山梨県立中央病院、（社）山梨県看護協会

1 はじめに

中国四川省成都市から参りました陳娟と申します。四川大学華西医院に就職してから、１年ぐらいの間に、臨床看護、看護教育、看護研究等に携わっていました。世界的な老齢化に伴い、日本は 1970 年から、中国も 1999 年から高齢化社会に入ってきました。中国にとっては、日本が 30 年多くの対応経験を持ち、その充分な老人施設、老人看護及び管理システムを参考にできると思います。その夢を抱いていた私は幸運にも今年、自治体職員協力交流研修員に推薦され、四川省の姉妹都市である「富士の国」山梨県に参り、山梨県立中央病院と山梨看護協会で７ヶ月間看護研修をさせていただきました。山梨県と四川省が友好県省締結 25 周年の今年、私は協力交流研修員として、本事業に参加できたことを光栄に存じます。それでは、私が受けた研修内容を述べたいと思います。

2 研修の概要

2.1 全体研修

日本に到着してから、東京で総務省と CLAIR 主催の全体研修が始まりました。中国で職業上のある資格試験を受けなければならないので、他の研修員と比べて私が着いたのは１日くらい遅くなりました。オリエンテーションの内容を説明してくれ、翌日、日本語テスト及び山梨県担当者との初面談が実施され、１ヶ月ぐらいだけ日本語を学んだ私にとっては、非常に緊張しました。そのほか、東京都庁及び国会議事堂の見学も用意していただきました。東京研修修了後、JIAM(全国市町村国際文化研修所)で約１ヶ月半主に日本語勉強が始まりました。JIAM が日本最大の湖である琵琶湖の近くにあるので、毎日琵琶湖の美しい景色を見ながら日本語を勉強するのはとても楽しかったです。日本語を勉強すればするほど皆の日本語能力が向上してきて、お互いに大切な友達になりました。自転車で琵琶湖畔の見物、JIAM の体育館でのバドミントンの試合、美味しかったヤマモモ、また最終の成果発表会と送別会等、大変楽しい思い出であり、今でも懐かしくて忘れられないです。

JIAM での楓クラス

2.2 専門研修

2.2.1 山梨県立中央病院での研修について

2.2.1.1 系統的な看護管理

中央病院看護部の管理組織として、一人の看護部長と三人の副看護部長が役割によって、それぞれ異なる責任を負っています。仕事や責任が明確に分けられているので、相互的な影響と同じ仕事の重複を避けられます。また、病院には看護の質検討委員会、

リスクマネージメント委員会等、いくつかの委員会があり、メンバーが看護師長を含めるほか、異なるレベルの看護師も有しています。

2.2.1.2 責任を持つ看護実践

まず、中央病院では固定チーム継続受け持ち制を使っております。固定チーム継続受け持ち制とは、看護師を固定的にチームに分け、患者が入院から退院まで同じチームが担当することです。第二に、中央病院では電子カルテを使用するので、看護記録や患者プロフィール等は全部パソコンで入力して保存されます。日本看護協会の看護記録様式に基づき、NANDA(北米看護診断)と看護過程にモデルして決められた看護記録システムは万全です。第三に、栄養管理の場、看護師が毎回患者の食事割り数を記録し、患者栄養状態の低下時 NST チームの支援にやってくる、というような患者を中心とした方法です。また、電子カルテの中に、Design-R 評価表を使用し、認定看護師から専門的な処置と指導等があり、褥瘡リスクアセスメント、褥瘡状態と経過評価、体圧分散寝具の選択基準等もあるので、褥瘡管理は系統的です。最後に、クリニカルパスの作成と管理認定、パソコンで電子パスの使用過程等を学びました。中央病院は、豊富な経験を持っており、クリニカルパスの管理系統が形成しました。一種疾病に対するパスは、医療用と患者用の 2 つの表を有し、それに、パスの適応基準、役割分担、パリアンスコード表、退院基準等もあります。

2.2.1.3 チーム医療と地域医療連携

山梨県立中央病院医療連携部

中央病院は最大の特徴がチーム医療です。患者を中心として、医師、看護師、管理栄養士等がチームとなって協力しあいます。医師と看護師の定例会、緩和ケアでの合同コンファレンス、等々のようなチーム医療の表現です。また、中国では地域医療連携システムがないので、たくさん聞いたり見たりして、医療連携についてよく理解するようになりました。地域医療連携とは、主に地域医療ネットワークを作るものです。医療施設を利用できやすいため、同じ地域での医療機関がネットワークの形で繋がっています。連携中には、診療情報提供書、看護師の継続看護連絡票等、いろいろな連絡情報を提供しなければ行えません。

2.2.1.4 看護教育及び看護研究

中央病院にレベル別の看護部卒後教育体系があります。レベルによって教育計画、到達目標、最終評価等をしっかり時間割を作って行います。クリニカルラダー制に合わせて看護師能力の育成には重要だと思います。また、毎年、看護部調査委員会が看護職務満足度調査、タイムスタデイ調査及び夜勤に関する調査ワーキングをし、調査報告を読んでたくさん学びました。特に、タイムスタデイ調査に看護業務区分、調査表の形式、入力方法等が非常に参考になると思います。

2.2.2 山梨県看護協会での研修について

訪問看護の研修後、よく日本の訪問看護制度と在宅医療システムを理解するようになりました。日本の在宅では、“介護保険”又は“医療保険”を使って訪問看護を利用することができます。介護保険での訪問看護を利用するには、まず市町村に利用申請をして「要介護認定」を受ける必要があります。医療保険での訪問看護を利用できるのは特殊の条件があり、主治医の診察によって「訪問看護の必要性がある」と判断

された場合、患者や家族から訪問看護の利用を申し込みます。どちらで訪問看護を利用する場合でも、必ず主治医からの「訪問看護指示書」の交付が必要となり、一般的に半年一回の交付があります。「介護保険での訪問看護」の訪問回数は、ケアマネージャーが計画して、特に制限がありません。一方、「医療保険での訪問看護」の場合は、特別疾病以外の方が週 3 回までの回数制限があります。また、介護保険の利用者はケアマネージャーにサービス計画の作成を依頼します。中国でも日本でも、高齢社会と家族形態の変化に伴い、訪問看護と介護が重要になると思います。

山梨看護協会

3 帰国後の展望

山梨県立中央病院での研修を通じて、異なる国の医院文化、管理、実践等を体験し、華西医院の現状とを比較していろいろな課題が感じられ、大変参考になると思います。第一に、中央病院では、各職員の業務説明書は明確に書かれますが、華西医院では職種別の役割説明書しか具体的な業務分掌が決まっていません。看護師や補助者が具体的な業務内容を把握するため、やはり業務説明書のほうがいいと思います。また、四川省の医院もチーム責任制を実行していますが、チームのメンバーは固定ではありません。患者を中心として、看護の質を向上するため、固定チーム制が採用可能であることを確信しています。第二に、中国と日本の看護記録は違うので、それぞれのメリットがあり、両者が異なる所を研究する価値もあります。看護過程に基づくホリステイック看護で栄養管理や褥瘡管理等を包括している看護記録は中国にとてもいい参考です。また、クリニカルパスの発展に、中央病院のそれについての研究や管理経験、及び電子パスの使用等は華西医院に手本にしたいと思います。レベル別に対する継続教育計画、チーム医療、タイムスタデイ調査等が参考に値すると思われます。最後に、中国の地域看護はまだ様々な問題があるので、日本の訪問看護支援事業、訪問看護制度と実践等を学んで中国にその経験を参考にする点や研究課題となります。

4 おわりに

研修も修了となります。美しい自然、綺麗な環境、先進的な医療等を有している日本、勤勉で時間を厳しく守る日本人が私に深く印象に残っています。山梨県での研修中、市川大門の花火大会で浴衣を着て綺麗な花火を観賞、身延山で古いお寺を見物しながら日本の宗教文化を感銘、一生懸命富士山頂まで登ってご来光を満喫、またいろいろな名所を見物し、この国の民族文化を体験してよく勉強になりました。関西旅行へ行ったとき、広島で原爆ドームと平和記念資料館を見学、神聖的な厳島神社と大鳥居、美しい紅葉の龍安寺、おまけに神秘な三十三間堂、優雅な歌舞伎の演出、等々を通して、更に日本の文化を深く理解しました。8 ヶ月間ぐらいの研修生活は私の人生にとって、とても貴重な体験であり、多大なヒントを与えてくださいました。

最後に、貴重な研修機会をご提供くださった(財)自治体国際化協会、山梨県庁、日本に着いたとき手伝ってくださった(財)自治体国際化協会経済交流課の皆様、山梨県立中央病院と山梨県看護協会でやさしく、繰り返し教えてくださった皆様、そして、毎日の研修と生活に応援してくださった山梨県国際交流センターの皆様に、心から厚くお礼を申し上げます。本当に御世話になりました。ありがとうございました。

「看護師研修を受け入れて」

自治体名：山梨県
研修員名：陳　娟
派遣元自治体：四川省人民政府外事弁公室
研修分野：看護
研修期間：８ヶ月
主な研修部署：山梨県立中央病院・（社）山梨県看護協会（訪問看護ステーション）

１．　背景・目的

山梨県では、国際協力の一環として開発途上国の自治体の職員を本県に受け入れ、日本の先進的な技術や知識を習得する機会を提供するとともに、県民との交流を通じて友好親善関係の増進を図る事業としてこの研修を実施している。

当院では、過去に３名の看護師研修生を受け入れており、最近では、平成 18 年に看護管理の研修生を受け入れた経験がある。山梨の医療・看護の状況を知ってもらう機会としてまた、中国の看護の現状や文化にふれる良い機会となっている。

２．　研修内容、事業実施にあたって工夫、苦労したこと

当院では、循環器病棟を皮切りに２日～２週間を目安に１４部署の研修を開始した。応募時に出された希望する研修分野を中心に実習できるよう計画を立案した。また、日本における地域連携の実際を現場で体験できるよう、今年度は訪問看護ステーションでの研修を、一ヶ月計画した。院内では、化学災害訓練や大規模災害訓練等も研修期間内にあったので参加できるよう配慮した。また土曜日であったが当院看護部学術集会（研究発表会）にも積極的に参加した。言語については、最初日本語の語学力について不安であったが、電子辞書を常に持ち、わからない時はすぐに引いて、理解するまで質問したり、自分から説明する熱心さが見られ問題はなかった。研修始めに師長会議で紹介・あいさつし顔を覚えてもらったことから、どこでも声をかけてもらえ、すぐにうち解けて病棟に受け入れられていた。

３．　成果・課題

１４部署の看護師長及びスタッフの協力により、日本の医療・看護の特徴や当看護部の看護について見学・説明の中で伝えることができた。実習の中で日本と中国の看護体制や看護記録の違いを実感すると共に、自国で勤務している呼吸器科の医療・看護は同じようだと理解していた。どこの病棟に行っても積極的にコミュニケーションが図れ、熱心に勉強していた。研修希望にあった地域との連携については、院内の地域連携科だけでなく、日本では訪問看護が在宅医療を支えていることを伝え、３ヶ所の訪問看護ステーションの実習を加えた。病院からの連携システムがまだ確立されていない中国の状況なので大変参考になったとの事であった。また、学校で学んだ緩和ケアの知識を実際に実習し、再度学習することで理解が深まったと感動していた。当院の電子カルテを説明する中では、クリニカルパスに関心を寄せ、資料を集め学習をし、持ち帰った。病棟のオリエンテーション用紙やマニュアル等も熱心にメモし学習していた。陳さんからも中国の看護の様子を話してもらい体制や文化の違いにふれることができ、日中友好に繋がった。

Thank you Takayama

Host Institution: Takayama city, Gifu Prefecture
Name: He FuGuang
Country:The People's Republic of China
Training Institution:Takayama Government Office

1. Reasons for applying

I came from the beautiful Lijiang ancient town which has been certified as one of the World Cultural Heritage in 1997 by the UNESCO, it lies in the south-west of China, every year millions of people come to visit and travel industry became the pillar industry of Lijiang. But we faced the serious contradiction between economic development and environment protection , as well as the protection of the original local culture. As a staff in Lijiang Tourism Administration, I want to have a research on these topics in Japan which is a developed country, and to acquire some useful experiences on the management way. Thanks to the friendship between Takayama and Lijiang city that I have got this valuable opportunity to receive the training in Takayama city, and thanks to the perfect work of the staff of CLAIR as well.

2. Summary of Training

A. General Training

We arrived in Japan on May 23rd, 2010, from then on we have begun our excited and unforgettable life in the beautiful country. During 23rd to 25th, we accepted orientation training by which we primarily got to know Japanese society, the government structure, the custom, the regulation we need to obey, and useful information that is beneficial for us to live in Japan easily. CLAIR also prepared a wonderful tour of Tokyo city.

We moved to JIAM on May 26th by the famous express railway, JIAM lies in a quiet place which near to the beautiful Biwako Lake. There we have been divided into different classes in according to various Japanese proficiencies. Japanese teachers is very good , after one and half month I had made a big progress in my Japanese skill , besides the linguistic knowledge, JIAM and CLAIR provided some useful courses for us , such as special lecture , tea ceremony , and organized sightseeing to some famous travel and historical spots by which we learned Japanese culture and custom. During the short time, we have formed a deep friendship with teachers and trainees, of course between staffs of CLAIR who have been accompanying us through out the training course in JIAM.

B. Specialized Training

We arrived in Takayama on July 8th, and warmly welcomed by the staff in the Secretary and International Communication Section, from then on we were not strangers any more, also the office arranged a very formal greeting with Takayama Mayor, they showed great respect and hospitality to us which moved us so lot .My training in Takayama includes 3 parts.

B1.Genaral Administration Training (Jul 12th-Aug 27th)

During this time I have studied the organizational structure of local government , the composition of local economy, duties of different part of the government , and financial problem the government faced . The government has done a lot to cut down the deficit and managed to alleviate the financial burden by optimizing the structure of offices.The government also pay great attention to the public project , such as barrier free design of the city ,which affords great convenience to travlers and the local people especially for the disabled. Every one in the City Hall holds responsible and serious attitude towards job ,and they work so hard that I usually see people work overtime.

B2. Tourist Service (Aug 30th-Oct 1st)

I was assigned to have the training in Hida no Sato within this duration. Hida no Sato is a very beautiful scenery spot in Takayama ,it lies in the south-west of the city , in fact it is a folk village , there are many old buildings (gassho zukuri) that had been moved from other places of Hida region ,such as the famous Shirakawa village, and there are many exhibitions of tools and articles used by ancient people in Hida region. Like a time tunnel, from there visitors may trace back to the old time to feel the original local life. There are many tourists from abroad and domestic regions, the director and the colleagues are very kind to me, showed detail of the work to me , I have learned many useful experiences about management: Firstly, they do everything in a meticulous way perfectly , they have made exact written records about the whereabouts of each facility. Secondly, they affords very convenient facilities to travelers free of charge , includes wheel chair ,electric car, baby car , pet car, umbrella, rain boots and so on , these will make a good impression to the guests. Thirdly, they provide humanized services with warm greeting, I will never forget one day, it suddenly got raining, staffs in the office ran out to bring umbrellas to guests who had not taken one. Fourthly, Hida no Sato has special classroom in which guests can study traditional handcrafts making, at the same time to experience the Japanese culture. Finally, the village helds some interesting festival to absorb visitors according to seasons . All of these are of good experiences for my city to draw on.

training in Hida no Sato

B3.Tourist Information Management (Oct 4th –Dec28th)

During this time , I was taking the training course at Takayama Tourist Information Center in front of the train station . At the beginning, I met some difficulties, especially when answer in Japanese, but the staff encouraged me to overcome, then a week later I could answer many questions from tourists. Staffs are learned and speak English well, answer questions face-to-face, on telephone or by e-mail. Three months of training in the Information Center brought to me a valuable chance to understand the situation of Takayama tourism industry and the managing way of tourism information. The following aspects left me with a deep impression : Firstly ,it's easy to get a travel map in multilingual version , and there's different maps and pamphlets for

various use such as accommodation, food, communication, souvenir, and these information are being frequently upgraded. Secondly, there's good cooperation between reception terminal and the information center, for example some hotel or restaurant will inform the latest information (rest time or sale events) to the center, and the center will reflect some suggestions or problems to those entities. Thirdly, the staff get used to studying and collecting information, the first thing they do in the morning is to read news to get the latest information about the weather or some useful information which is beneficial for their work. Finally, the information center makes a multi-functional role, it becomes a platform to present charm of Takayama and to collect the firsthand data about the market which will be validated for decision maker.

B4. Life in Japan

I have received great assistance from Japanese friends, they invited us to have dinner with their family to experience Japanese style daily life, they brought us to different places to enjoy with local people their traditional festival and to acquire a zero distance experience of Japanese culture. I have traveled to many places with my friends, the cities are all very clean and beautiful, life is convenient in Japan. I have made a very happy and colorful living in Takayama, in hot summer I took part in Japanese dance parade, enjoy the beautiful firework nights, in golden autumn I was absorbed in the beauty of colored leaves, in white winter I went to bath in natural hot spring, and enjoy the falling snow and moutains covered with snow, all of these experiences have become a precious memory for my life

.

3. Plans upon returning home

Lijiang is striving to become an international tourist spot, and to achieve a sustainable development, to realize these purpose we have to do more to enhance the convenience of city facilities, to form a reasonable and harmonious relation between development and conservation and promote service quality, I will introduce those useful knowledge to our local government .On the other hand, I think we need more communication between two countries and people, we need understand , we are trying to be better. I'm glad to make a role of bridge for two sides to communicate, I have a good impression with Japan after 7 months of living in the country I will cherish the remaining times in Takayama, and to finish my special training successfully. Thank you Takayama !

Chinese cooking class (Lijian week)

「シェシェ、タカヤマ」

受入自治体　　岐阜県高山市
氏名　　和　復光（He FuGuang）
出身国　　中華人民共和国
研修先　　高山市役所

1. 本事業に応募した動機

私は、美しい古都「麗江（Lijiang）」の出身です。1997 年にユネスコ世界文化遺産に指定された麗江は中国南西部に位置し、毎年、何百万人もの観光客が訪れ、観光産業が麗江の主要産業の一つとなっています。しかし、われわれは経済発展と環境保護、そして伝統的な現地固有の文化の保護という深刻な矛盾に直面しています。麗江観光行政局の職員として、先進国である日本におけるこうした話題について調査して、対処法に関する日本の有益な経験を知りたいと考えました。高山市での貴重な研修機会を与えてくださった高山市と麗江市との友好関係に感謝いたします。また、見事な仕事ぶりを見せてくださったCLAIR（自治体国際化協会）スタッフの方々にも感謝しております。

2. 研修の概要

A. 全体研修

われわれは 2010 年 5 月 23 日に日本に到着した瞬間から、この美しい国での期待に胸躍る忘れられない生活が始まりました。23 日から 25 日までオリエンテーションがあり、まず最初に、日本社会、行政構造、習慣、守らなければならない規則、日本での快適な生活に役立つ情報についての研修を受けました。CLAIR はまた、東京都内を巡る素晴らしいツアーも開催してくれました。

5 月 26 日に、有名な新幹線で JIAM（全国市町村国際文化研修所）に移動しました。JIAM は、美しい琵琶湖に近い静かな場所にあります。そこで私たちは、日本語の能力別にいくつかのクラスに分けられました。日本語の先生はとても優秀で、私の日本語は、1ヶ月半後にはかなり上達しました。言語面の知識だけでなく、JIAM と CLAIR は、特別講義や茶道などの役に立つ講座を開いてくれ、いくつかの有名な観光地や史跡への旅行を催してくれました。これらは日本の文化や習慣を学ぶのに役立ちました。私たちは短期間のうちに、先生方、研修生、そしてもちろん、 JIAM での研修コースを通して私たちに付き添ってくださった CLAIR のスタッフとの深い友情を築くことができました。

B. 専門研修

われわれは7月8日に高山市に到着し、秘書国際課の職員から暖かい歓迎を受けました。その時点から、私たちはもう「よそ者」ではなくなりました。また、市当局が高山市長との公式の面会を手配してくれ、私たちへの敬意と暖かいもてなしを示しくれたことにとても感動しました。高山市での私の研修は次の 3 つの部分からなっています。

B1.　一般行政研修（7 月 12 日-8 月 27 日）

この期間には、地方自治体の組織構造、地方の経済構成、自治体の各部門の任務、自治

体が直面する財政問題について学んだ。自治体は赤字を抑えるために努力し、組織構造の最適化によって財政負担の軽減に取り組んでいた。自治体はまた、観光客、そして特に障がい者に大きな利便性を与えるバリアフリーの都市設計などの公共プロジェクトに非常に注目している。市役所の職員一人ひとりが、職務に対して責任ある真剣な姿勢で臨み、非常に一生懸命働いており、残業している姿をよく目にした。

B2.　観光サービス（8 月 30 日−10 月 1 日）

この期間、私は「飛騨の里」での研修を行うこととなった。飛騨の里は、高山の非常に美しい景観地で、市の南西部に位置している。実際、ここの民俗村には、有名な白川郷など、飛騨地方の他の場所から移築された多くの古い建物（合掌造り）があり、飛騨地方の昔の人々が使用した道具や品物が数多く展示してある。ここを訪れる人々は、まるでタイムトンネルに入ったかのように、現地の昔の生活を感じることができる。外国と日本国内からの多くの観光客があり、この施設の管理責任者と職員の方々はとても親切で、仕事の内容を詳しく教えてくれた。私にとり、管理運営を学べる有益な体験であった。第一に、この飛騨の里の職員は細部に至るまですべてを完璧にこなし、各施設の所在の正確な記録を書面に残している。第二に、彼らは、車椅子、電気自動車、ベビーカー、ペットカー、傘、雨靴など、便利な設備や用具を観光客に無料で提供している。これは、観光客にとても良い印象を与える。第三に、彼らは、暖かい歓迎の挨拶で迎える人間的なサービスを提供している。私には忘れられない日がある。その日、突然に雨が降り、事務所のスタッフが傘を持っていない入場者に傘を手渡すために走り出したことである。第四に、飛騨の里には特別教室があり、入場者は伝統工芸品の作り方を学ぶと同時に日本文化を体験できる。最後に、民俗村は、入場者が楽しめる季節に合わせた興味深いイベントを開催している。これらすべてが私の住む市でも参考にできる素晴らしい体験となった。

B3.　観光案内所の運営（10 月 4 日−12 月 28 日）

この期間、私は、高山駅前の飛騨高山観光案内所で研修を受けた。最初のうちは、特に日本語で応対するのが難しかったが、スタッフの励ましによって、１週間後には、観光客の多くの質問に答えられるようになった。スタッフは知識が豊富で、英語を上手に話し、直接または電話や電子メールで質問に答えている。私にとって、観光案内所での３ヶ月の研修は、高山の観光産業と観光案内所の運営状況を理解する貴重な機会であった。特に次の点が深く印象に残っている。第一に、多様な言語版のトラベルマップが入手しやすく、宿泊施設、食べ物、コミュニケーション、お土産など、さまざまな利用のための異なった地図やパンフレットがあり、それらの情報が頻繁に更新されている。第二に、たとえば、一部のホテルやレストランが案内所に最新の情報（休業時間やセールスイベント）を提供し、案内所がこれらの施設に対して提案や問題点を提示するなど、受入施設と案内所との間に好ましい協力関係がある。第三に、観光案内所のスタッフが、情報を調べ収集することに慣れていて、彼らが、朝、出勤して一番始めにすることは、新聞に目を通して、自分の仕事に役立つ天候その他の最新の有用な情報を得ることであった。最後に、観光案内所は、多様な機能を果たしていて、高山市の魅力を知らせ、市場に関して直接得たデータを収集するプラットフォームとなっており、それらのデータが「意思決定者」によって検証されている。

B4.　日本での生活

私は日本の友人たちから多くの助けを受けた。彼らは、私たちに日本人の日常生活を体験させるために、家族と一緒の夕食に招待してくれ、現地の人々と伝統的なお祭りを楽しめるよう、そして、日本文化を肌で感じさせようといろいろな所に連れて行ってくれた。私は、友人たちと多くの場所に旅行した。どの都市もすべて清潔で美しく、日本での生活はとても快適だった。高山での生活はとても幸せで、変化に富んでいた。暑い夏には日本の踊りの輪に加わり、夜は美しい花火を楽しみ、黄金色の秋には紅葉の美しさを堪能し、真っ白な冬には天然温泉の湯につかり、降る雪と雪に覆われた山々を楽しんだ。これらの体験すべてが、私の人生にとり大切な思い出となった。

3. 帰国後の展望

麗江（Lijiang）は国際的な観光地となり、持続可能な発展を遂げるべく努力しています。これを実現するために、われわれは、市の施設の利便性を高め、発展と保護との間の合理的で調和のとれた関係を作るため、そしてサービスの質を向上するためによりいっそう努力しなければなりません。私は日本で得た有益な知識を麗江の行政に取り入れたいと思っています。その一方で、私は日本と中国の間、両国の人々の間のコミュニケーションの推進が必要と考えます。

私たちは互いに理解することが必要であり、われわれはそのために努力しています。私は、自分が両国のコミュニケーションの架け橋になれたら嬉しいです。私は、日本で７ヶ月間生活してみて、この国に対してとても良い印象を持ちました。高山での残りの日々を大切に過ごし、この特別な研修を無事に終えたいと思っています。

「シェシェ、タカヤマ」

「　友好都市中国雲南省麗江市から研修員を受け入れて　」

自 治 体 名	岐阜県高山市	
研 修 員 名	① 和　復光	② 和　暁燕
出　身　国	中華人民共和国	中華人民共和国
研 修 分 野	観光	文化財
研 修 期 間	10 ヶ月	10 ヶ月
主な研修先	観光課	文化財課

1　背景・目的

高山市は、２００２年３月２１日に中国雲南省麗江市と友好都市提携を結び、両地域の相互理解と友好関係を促進するために、さまざまな分野で人材の交流と協力活動を行うことに合意しました。２００４年よりその交流・協力活動を具体化するために、この事業により麗江市から、観光、農業、教育などの幅広い分野でこれまで１１名の研修生を受け入れています。当市は、２００５年に周辺の９町村と合併し、日本一広い面積を有する都市であり、年間４００万人を超える人々が訪れる国内有数の観光地です。近年、海外からの誘客に力を入れており、昨年は４０数カ国から約１５万人の外国人が当市を訪れます。当市及び麗江市はともに古い町並みが保存されており、独自の伝統文化が伝えられ、山岳など素晴らしい自然景観を有しています。そういった背景の中で、麗江市から観光客の誘客、観光関連のインフラを含めた受入れ体制整備を図る中で、高山市の観光施策を参考にしたいとの強い要望があり、麗江市の行政担当者を研修生として、高山市並びに日本の行政施策を学んでいただくことを目的としています。

2　事業実施にあたっての工夫、苦労したこと

《和復光》

主に、観光施設等（飛騨の里、観光案内所）での研修を実施し、日本での観光行政について学ぶとともに観光案内所での通訳業務や、誘客についての知識を学ぶ。

麗江ウィーク料理教室

研修当初は、日本語能力が乏しかったため、専門研修が円滑に行えるように同じく中国から来ている国際交流員による日本語講座を行った。市内に観光施設が充実しているため、さまざまな観光施設が充実しているため、さまざまな観光施設において現場での実務研修を充実した。

また、市民との交流の場として、友好都市麗江を紹介する「麗江ウィーク」を開催し、麗江の家庭料理教室を行い、市民との交流を深めるとともに市民の国際理解を深める機会ともなった。

《和　暁燕》

主に、文化財課での研修を実施し、日本の文化財保護等について学ぶとともに観光案内所での通訳業務や、誘客についての知識を学ぶ。

研修当初は、日本語能力が乏しかったため、専門研修が円滑に行えるように同じく中国から来ている国際交流員による日本語講座を行った。文化財課での研修及び文化財が観光と密接なつながりがあるため、観光施設での実務研修も行った。

民族衣装で民族舞踊を披露

また、在住外国人が地域で安心して暮らせることを目的に行った「中日交流サロン」では、民俗衣装を着て民族舞踊を披露し、市民との交流を行った。

3　成果・課題

今年度の研修生は、麗江市では、主要産業である観光、文化財に従事しており、早くから国際観光都市として観光客の受入体制の整備を図っている当市での研修は現場での研修に重点を置き研修を行った。学校行事や地域の行事にも積極的に参加し、友好都市麗江市のＰＲを行うとともに、市民の国際理解を深めるきっかけとなった。

今年は、麗江市との提携１０周年を迎える節目の年でもあり、今後益々盛んになる両市の交流の架け橋となっていただけることを期待している。

Toward a New Educational Exchange: Building Bridges with Kids' Smiles

Host Institution:	Toyohashi City, Aichi
Name:	Angela da Silva Picoli
Country:	Federative Republic of Brazil
Training Institution:	Toyohashi City Hall School Education Division (Toyohashi Municipal Iwata Elementary School)

1. Reasons for applying

I applied to this program in order to deepen my knowledge. Japan is a country where many Brazilians live, and I thought that learning about Japanese history, culture, and customs would be a very valuable experience. Also, the opportunity to receive training at a school attended by Brazilian students was another appealing feature of this program.

In the past several years, the descendants of Japanese people who immigrated to Brazil have moved to Japan for work in large numbers, and this immigration pattern been given the name "dekasegi," which is a Japanese word that means "leave to make money." However, recently there have been more and more cases where the children of these dekasegi Nikkei Brazilians return to Brazil after living in Japan for a short period. These children, unable to receive adequate accommodation from their teachers and local governments, are often unable to speak their native language Portuguese or the Japanese they acquired in Japan at the level corresponding to their age. As an educator, I wanted to learn about the situation faced by the children who stay in Japan as well as those who return to Brazil and about the Japanese education system, which is why I chose to enter this training program.

2. Summary of training

(1) Working with the children

The most memorable part of my training was when I taught students activities (games, dances, toy-making, etc.) that students do in Brazilian schools. For second-grade students in the international class, I thought of a toy-making class. I selected items that second-graders would be able to make and made toys together with the students using newspaper, masking tape, and other easily obtainable items. The students were very happy to learn how to make toys, and they quickly went on to teach their Japanese friends what they had learned.

For fifth-grade students, I taught Brazilian dance during a camping trip. Although I only rehearsed with Brazilian students, the entire class and all the teachers joined in and danced together during the main performance. I was also impressed when students made their own food and cleaned up the area around them during the camping trip.

The children I was most involved with were fourth-graders. I taught these students songs such as “Sapo não lava o pé” and “Cabeça, ombro, joelho e pé” and Brazilian games such as “Pega-pega,” “Adoletá,” and “Patinho feio.” I taught all of these in Portuguese, but many Japanese students also participated. Everyone talked and sang in Portuguese during these activities and had lots of fun. Students seemed very happy to get to learn about Brazilian culture and games.

In addition, I also participated in physical education classes, which is the subject I specialize in. In these classes, I taught children dances as well as games and exercise that make use of ropes.

(2) Differences between the Japanese and Brazilian education systems

During my half-year in a Japanese school, I noticed differences between the Japanese and Brazilian education systems in a variety of areas. For example, the full-day school system is still rare in Brazil, and, unlike in Brazil, cleaning and distribution of lunches in Japan is done entirely by students. I was particularly surprised by the good manners shown by teachers and students and by the respect that is shown when interacting with others. I was also interested in the importance placed on teachers, parents, and the community in domestic science and morality curriculum where students are taught the importance of rules and responsibility.

I also noticed that Japanese school facilities are well equipped to support students. For example, a typical Japanese school has a clinic, a kitchen classroom, a music room, an art room, an audio/video room, a gymnasium, a sports field, and large amount of high quality sports equipment. I was also impressed by the vegetable and flower gardens that students take care of.

Likewise, I felt that the system for relaying announcements at the start and end of the school day, the system where upper-class students lead younger students on the walk to school, and break times were all good systems. I was very impressed by the way upper-class students help students in lower grades on the way to and from school. I also thought break times between classes where students can go to the bathroom or get a drink of water are very efficient because it reduces the amount of times that students leave the classroom in the middle of class. I also found club activities very interesting, and I was highly impressed by the students when I saw them working hard practicing sports or music for a tournament or concert. Japanese school children do not just study hard; they also put great effort and enthusiasm into sports and cultural activities.

Elementary school teachers also showed great pride and responsibility when they interacted with students. Unlike Brazil, teachers in Japan teach all subjects. Also, parents can watch their children’s activities at school through a class observation system. Parents and teachers showed great interest in education as a part of their children’s development.

(3) Information session for Brazilian parents

I offered an information session for Brazilian parents in order to explain what schools in Brazil are like. I explained the differences between the Japanese and Brazilian education systems, what mental care is available to children at school, what life in school is like, and the importance of the parents at home. In speaking with these parents, I realized that there are children with emotional problems among the Brazilian students.

3. Plans upon returning home

The experience I gained over the course of this training program has enabled me to expand my vision as a specialist in education. I believe that what I learned will definitely be useful after I return to Brazil.

After returning to Brazil, I intend to speak with people involved with education in the city of Paranavaí to propose offering more opportunities to learn about the importance of nature such as camping trips and outdoor educational activities. I also hope to run events like exhibits of students' works of art and events that parents and children can participate in together.

I was very interested in the domestic science subject in Japanese schools where children get to learn cooking, cleaning, and other fundamental skills and knowledge. However, Brazilian schools already have employees who are in charged with cooking and cleaning, so implementing this as a subject in Brazilian schools would be difficult. Nevertheless, I would like to explore whether or not there is some other way we may be able to educate children on these things.

Furthermore, I would like to incorporate exercises, dances, sports, and arts that I learned during this training program at school I am employed at. I would also like to teach children and other teachers about differences in culture. I also am thinking about urging them to learn about the history of Japanese immigrants.

4 In summary

Before I came to Japan, I was worried because I was unsure what kind of training program it would be. However, education is Japan is excellent, and I am glad to have been able to learn what I did. I hope that I can become a bridge between the education systems of Brazil and Japan by putting my experience to use after returning to Brazil.

新たな教育交流へ　～子どもの笑顔を橋渡し～

受入自治体：愛知県豊橋市
氏　　名：アンジェラ・ダ・シルヴァ・ピコリ
出　身　国：ブラジル連邦共和国
研　修　先：豊橋市役所学校教育課（豊橋市立岩田小学校）

１　本事業に応募した動機

私は、自分自身の知識を深めたいと思いこの事業に応募しました。日本はブラジル人が多く住んでいる国であり、日本の歴史、文化、習慣等を知ることはとても貴重な経験になると思いました。また、ブラジル人生徒が在籍している小学校で研修を受けられるということも魅力的でした。

近年、ブラジルに移民した日本人の子孫が日本へ出稼ぎに行くことが多くなりましたが、その日系人の子どもたちが一時日本に在住した後、ブラジルへ帰国するケースが増えてきています。しかし、その子どもたちに対して自治体や教師は適切な対応ができていないため、子どもたちは母国語であるポルトガル語も、日本で学んだ日本語も十分にできない状態でいます。

教員である私は、日本に残る子どもやブラジルへ帰国する子どもの現状、日本の教育制度等を学びたいという思いでこの研修を受けました。

２　研修の概要

（１）子どもたちとの関わり

この研修で最も印象に残っていることは、ブラジルの学校で行われている遊び（ゲーム、踊り、おもちゃ作り等）を生徒たちに教えたことです。

（おもちゃ作り）

国際学級に通っている２年生の外国人生徒向けに、おもちゃを作る授業を考えました。身近にある新聞紙やマスキングテープなどを使用し、小学２年生でも作れる簡単なものを選んで一緒に作りました。生徒たちは、おもちゃ作りを覚えたことをとても嬉しく感じたようで、さっそく日本人の友達にも作り方を教えていました。

５年生の生徒たちには、キャンプでブラジルの踊りを紹介しました。リハーサルはブラジル人の生徒のみで行いましたが、本番では全生徒と先生も参加してくれ、みんなで一緒に踊りました。また、キャンプで生徒たちが自分で食事を作ったり、周辺の掃除をしていたことに感心しました。

私が１番多く関わったのは、４年生の生徒たちです。この子どもたちには、「サッポ・ノン・ラバ・オ・ペ」や「カベサ・オンブロ・ジェエリョ・エ・ペ」という歌や、ブラジルの遊びの「ペガ・ペガ」や「アドレタ」、「パチニョ・フェ

イオ」などを教えました。これらは全てポルトガル語で教えましたが、日本人生徒からも大勢の参加がありました。みんなでポルトガル語をつかって話したり、歌ったりして楽しい活動となりました。生徒たちは、ブラジルの文化や遊びを少しでも知ることができてとても嬉しそうでした。

また、私の専門科目である体育では、縄を使った遊びや体操、踊りを教えて生徒たちと関わりました。

（生徒たちとブラジルの踊りを踊る）

（２）日本とブラジルの教育制度の違い

約半年間の学校生活の中で、様々な面において日本とブラジルの教育制度の違いを感じました。例えば、ブラジルではまだ普及していない１日制や、全校生徒が行う掃除、給食配膳等です。特に、先生や生徒が礼儀正しいことや、相手を尊敬して接していることには驚きました。また、先生や親、地域を大事にする気持ちや、責任と規則の大切さを教える家庭科や道徳といった科目に興味をもちました。

学校施設においても、日本は生徒たちをサポートするための設備が整っていると感じました。例えば、保健室、調理室、音楽室、美術室、放送室、体育館、運動場、スポーツ用品の数や質などです。野菜栽培や花壇を生徒がきちんと手入れしていることも印象的でした。

学校生活では、朝礼や放課後の注意事項伝達、上級生を先頭とした登校、休み時間はとてもよい制度だと感じました。登校では上級生が下級生の面倒を看ていることに感心しましたし、休み時間にトイレや水分補給をすることで授業中に教室を出ることがなくなり、効率的だと思いました。また、クラブ活動も興味深く、大会や演奏のためにスポーツや音楽の練習に励んでいる子どもたちは素晴らしいと思います。日本の子どもたちは勉強だけでなく、運動や文化活動にも熱心に取り組むという印象を受けました。

小学校の先生も、教師としての誇りや責任を持って子どもに接しており、ブラジルとは違い全科目を教えていました。また、授業参観では学校の子どもたちの活動の様子を保護者が見ることができます。教師や保護者が子どもたちの成長のために、教育に関心を向けていることが感じられました。

（３）ブラジル人保護者への講演

ブラジルの学校の現状等を伝えるために、ブラジル人の保護者に対して講演をしました。日本とブラジルの教育制度の違い、学校が子どもたちに対してどのような心理的ケアを行っているのか、学校生活の様子、家庭での親の役割の大切さを説明しました。保護者と話をする中で、ブラジル人生徒に何らかの情緒障害をもつ子どもがいることに気づきました。

３　帰国後の展望

今回の研修で得た経験により、私自身の専門的な視野を広げることができました。豊橋市で学んだことは帰国後も必ず役に立つと思います。

帰国後は、パラナヴァイ市教育関係者と話し合い、キャンプ等の野外活動や自然の大切さを学べるような行事を増やすよう提案したいと思っています。また、子どもたちの作品展示会や、親子で一緒に参加できるような行事も行いたいです。

日本の教科の中で、調理実習や掃除等の基礎知識等を学べる家庭科にとても興味をもちましたが、ブラジルには既に料理や掃除担当の職員がいるので、教科として実施するのは難しいかもしれません。しかし、別の方法で子どもたちに教育できないか模索していきたいと思います。

また、研修で学んだ体操や踊り、スポーツ、芸術等を私が所属している学校に取り入れ、生徒や他の先生に文化の違いを紹介したいです。そして、日本人移民の歴史を知るように勧める考えでいます。

（国際クラスでの授業風景）

４　おわりに

日本に来るまでは、どういった研修になるのか全く想像できず不安でしたが、日本の教育は本当に素晴らしく、日本で学べたことを嬉しく思います。帰国してからもこの経験を必ず生かし、豊橋市とブラジルの教育の架け橋になれたらと思います。

「教育交流都市ブラジルパラナヴァイ市から研修員を受け入れて」

自 治 体 名： 愛知県豊橋市
研 修 員 名： アンジェラ・ダ・シルヴァ・ピコリ
派遣元自治体： ブラジル連邦共和国パラナ州パラナヴァイ市
研 修 分 野： 教育
研 修 期 間： 6ヶ月
主な研修部署： 教育委員会学校教育課　豊橋市立岩田小学校

１．背景・目的

本市の公立小中学校には、平成 22 年度 4 月 1 日現在 1,122 人の外国人児童生徒が在籍しており、中でもブラジル国籍の児童生徒数は 762 人と外国人児童生徒の約 70%を占めています。

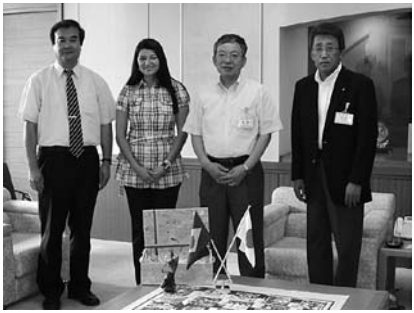
市教育委員会では、外国人の子どもたちが夢をもって学校生活を過ごせるよう、外国人児童生徒教育相談員やスクールアシスタントを配置するなど、環境整備を進めてきました。しかしながら、言葉の壁や文化の違いによって生じる様々な問題を抱えている外国人児童生徒は今なお多くいます。

こうした中、日本の教育制度の理解や、来日した児童生徒及びその保護者に対する指導への協力を期待して、市教育委員会では平成 19 年度よりブラジルの教員を受け入れています。研修員の帰国後は、現地で日本の教育制度を周知・指導し、公立小中学校での外国人児童生徒のスムーズな受入や不就学・不登校などの問題の解決を図ることを目的としています。

２．事業実施について

(1)研修内容

今回の研修は、豊橋市立岩田小学校において、日本語の理解が十分でない児童を取り出して授業を行う国際学級での授業観察及び授業実習や、夏休みに外国人児童を集めて学習支援を行うサマースクールへの参加などを行いました。


豊橋市役所表敬訪問

(2)工夫したこと

1 泊 2 日のキャンプなどの課外活動にも参加してもらい、通常授業以外の子どもたちの様子も見ることができるよう工夫しました。

ブラジルの学校では珍しい課外活動ですが、集団での活動・生活や、自然の大切さを学べる貴重な機会であることを知ってもらえたと思います。

また、小学校だけでなく、中学校や高等学校、ブラジル人学校、就学前のブラジル人託児所に通う幅広い年代の外国人児童生徒の現状を知るため、各機関の参観を行いました。ブラジルでは、保護者が学校活動に参加する機会が少ないため、保育園の運動会に保護者も一緒になって参加している様子が興味深かったようです。

(3)苦労したこと

学校生活には自然と馴染んでいくことができましたが、言葉の壁には悩まされていたようです。しかし、研修員が自発的に日本語教室に通ったり、学校の先生方の協力もあって少しずつコミュニケーションをとれるようになっていきました。

３．成果・課題

外国人の保護者は生活の中で仕事の比重が大きく、子どもの教育に関心が薄い傾向にあるといわれています。そのため、研修員が国際クラスの保護者向けに日本の教育制度や学校生活、親の教育に対する関わりの重要性について講演を行い、子どもの教育や将来に関心を持つきっかけをつくることができました。

国際クラスの子どもたちと

今後は、日本から帰国した子どもたちの現状や、ブラジルの教育現場の最新情報などの報告を研修員から受け、今後帰国する予定の子どもたちへの指導に活かしていきたいと思っています。また、日本の教育制度をブラジルで周知してもらい、来日する子どもたちが早期適応できるよう協力して取り組んでいきたいです。

本市では、日本の教育制度の周知や、日本へ入国する子どもたち・ブラジルへ帰国する子どもたちへの支援などを目的として、平成 22 年度から本市職員を半年間ブラジルパラナ州へ派遣しています。今後、ブラジルと豊橋市の相互の教員派遣を通して双方の教育環境向上に取り組んでいきたいと思います。

研修員が半年間の研修で得た多くの知識と経験をブラジルへ持ち帰り、現地の学校で活かすことで、ブラジルの子どもたちの明るい未来をつくっていってほしいと願っています。

日本の商工行政を学んで

受入自治体	鳥取県
氏　　名	金　蘭姫　（キム・ナンヒ）
出　身　国	大韓民国
研　修　先	鳥取県庁商工労働部

1　本事業に応募した動機

私の出身地である襄陽(ヤンヤン)郡は第 1 次産業が主な産業でさまざまな農水林産物が生産されています。また、韓国唯一の鮭が遡上する川があり、国内最高の品質を誇る松茸という特産物を持っています。しかし、我が襄陽郡は 1 次産業が主要産業でありながらも高齢化と過疎化が進んでいて年々耕作放棄地が増えている状況です。それに生産された 1 次産業の生産物や特産物をもっと付加価値の高い物へ商品化する技術力やアイデアが欠けおり、1 次産業の生産物を利用した新しい事業の展開などに苦労していて過疎化はますます進んでいます。

私はわが郡の 1 次産業の生産物をもっと付加価値の高い産業へ繋げる方法を学びたいと思い 2010 自治体協力交流研修事業の研修生として応募しました。

2　研修の概要

①東京研修(2010.5.23～26)

研修先：総務省、国会議事堂、東京都庁

5 月 23 日入国してから 3 日間東京に泊まりながら日本語研修や各自治体での専門研修に入る前のオリエンテーションや事前準備、都内視察が行われました。5 月 24 日開会式を始め、研修日程及び日本生活のガイダンス、総務省自治行政局国際室室長による日本自治体についての講演があり、25 日は日本語レベルチェック及び東京都庁、国会議事堂などの都内視察がありました。

②日本語研修(2010.5.26～6.24)

研修先：全国市町村国際文化研修所

東京研修を終え、1 ヶ月間滋賀県にある全国市町村国際文化研修所で日本語研修を受け、日本生活に慣れながら 2 回にわたるスタディツアーや伝統文化体験を通じて日本の伝統と文化について勉強することができました。また、最後の成果発表会のために各クラスごとに自由テーマを決め、勉強し、発表することによって日本語の実力はもちろん日本について勉強することができて非常に有意義のある研修でした。

JIAM 研修成果発表会　司会担当

③専門研修(2010.6.29～2011.3.18)
　研修先：鳥取県商工労働部
⑴市場開拓局(2010.6.29～7.31)
　市場開拓局は鳥取で生産されている物の販路開拓や生産サポート、伝統産業への支援や「食のみやこ鳥取」というキャッチフレーズをもとに食を中心に経済や地域活性化のためいろんな取り組みをしているところです。インターネット情報誌やネットマーケットなどに鳥取の物を紹介し、特に東京アンテナショップの「食のみやこ鳥取プラザ」を設置し首都圏の皆さんに鳥取の食を食べていただける機会を提供していました。鳥取の郷土料理を守りながら地元の農林水産物の消費に繋がるような郷土料理教室を開いたり、食品加工グループが専門家の意見を聞ける勉強会を開いたりするのは韓国ではまだ考えていないことなのでぜひ取り入れたいと思いました。

⑵産業振興総室(2010.8.1～10.31)
　鳥取には農林水産業以外にも食料品関連産業と電気機械関連産業が主要産業として位置付けられていました。産業振興総室では鳥取の経済発展と町の活性化のために新しい企業の誘致、既存産業への支援、革新及び先端産業への支援のためにいろんな政策を定め事業を展開していました。農商工こらぼ研究コンソーシアムの発足を通して相違する分野の連携の場を作ったり、トップデザイナーと連携して実際生産、販売を目的とする商品の企画から製造まで実習することによって企業自ら競争力を育む政策を実施していました。産業振興を行政側が引っ張るのではなく自ら生き延びる力をつけていく政策は韓国でも考えるべきだと思いました。また小さい県ながらも先端産業への取り組みはとても進んでいて先端産業への基礎的知識を得ることができてとても勉強になりました。

⑶経済通商物流室(2010.11.1～2011.1.31)
　経済通商物流室は鳥取県経済成長戦略をもとに各種中小企業への支援、商業地域活性化、物流支援及び環日本海定期貨客船関連業務など鳥取の経済の中枢の役割を担当していました。特に環日本海貨客船は2009年就航以来日本、韓国、ロシアを結ぶ唯一の航路であり鳥取の経済発展に寄与するとともに江原道との関係を友好交流関係から経済協力関係へともう一段階アップする媒介になっていました。経済通商物流室の研修では今まで考えたことのない物流という産業構成要素の大切さを知ることができました。ただ江原道の東海と日本を結ぶフェリーだと思っていた定期貨客船 DBS クルーズフェリーを鳥取県は県内国内だけでなく新たな海外市場の開拓に積極的に活用していました。物流のルートの変化を誘導し境港港の発展を図り、北東アジアの市場への進出を目指している鳥取県の取り組みはわが郡ももっと広い市場を目指さなければならないと思うきっかけになりました。

⑷雇用人材総室(2011.2.1～　)
　雇用人材総室では鳥取県の求職者のため就業活動を支援し、また鳥取県に優

秀な人材を受け入れるための努力をしています。また労働環境を改善するためにもいろんな政策を実施しています。就職活動をしている方に技術だけではなく、業務改善の手法、企画など実務を通して得られるノウハウを実務経験の豊富な講師を招き、求職者、現役従業者に実務ですぐ活用できるノウハウを伝授する人材育成プログラムはまだ技術を教える形の人材育成プログラムに集中している韓国にも取り入れたいと思いました。

⑸研修以外の活動

来日する前から自治体での研修以外に地域の皆さんとできるだけ触れ合いの機会を設けようと心がけていました。8月に鳥取市最大の祭りであるしゃんしゃん祭りに参加することになって、メインイベントである一斉かさ踊りの県庁チームの一員として参加させていただきました。韓国では一般市民が参加するパレードが一般的ではないのでなかなかできない貴重で楽しい経験でした。また主婦である私の長所を生かし鳥取の皆さんに韓国料理を紹介する活動をしました。鳥取県国際交流財団主催の「わいわいワールドイベント」(小学生を対象に世界の各国の料理を一緒に作り、伝統の衣装を着てみたり、遊びを体験するイベント）に 3 回参加しました。また鳥取商業高校の保護者向けに韓国の家庭料理の講習会もしました。料理教室に参加し出会った鳥取の皆さんは韓国料理が好きで、積極的に参加してくださったのでとても嬉しかったです。9月には浜坂小学校の「人権フェスティバル」に参加し、子供たちに韓国の伝統の結婚式について紹介しました。また、「第 6 回話してみよう韓国語大会」にスタッフとして参加し韓国語に興味を持っている鳥取の皆さんと触れ合うこともできました。いろんな国際交流イベントに参加することによって、仕事場では学べないことをたくさん学ぶことができました。そしてこれからわが郡との交流をどんな風に進めるべきかを考えるきっかけになりました。

韓国料理教室(鳥取商業高校)

3　帰国後の展望

最初の研修の希望分野は、わが郡の 1 次産業の生産物をどうすれば付加価値を高め、どう売っていくかということに集中していました。しかし、専門研修を通しての最大の成果は商工分野の全般についてもっと広い視野で見ることができるようになったということです。これは鳥取が人口の少ない小さな県ながらも県内国内に限らず北東アジアという広い市場を視野に入れていろんな戦略を持ち、政策を進めていることと先端産業へ先駆けている鳥取で研修を受けることができたからだと思います。

帰国後は、今回の研修経験を生かしわが郡の農水林産物や特産物の商品化など地域活性化に貢献したいと思います。またわが郡も日本海に面しており、DBS クルーズフェリーの発着地である東海（トンヘ）市と 50 分ほどの短距離であることを生かし鳥取県との間に経済的繋がりを作りたいと思います。

自治体職員協力交流研修員を受け入れて

自 治 体 名	鳥取県	
研 修 員 名	林　暁琳（リン・シャオリン）	金　蘭姫（キム・ナンヒ）
出　身　国	中華人民共和国	大韓民国
研 修 分 野	商工行政	商工行政
研 修 期 間	１０ヶ月	１０ヶ月
主な研修先	商工労働部	商工労働部

１．背景・目的

本県の国際協力の一環として、友好交流地域である海外の地方自治体職員を「協力交流研修員」として受け入れている。県庁各課において、本県が持つ行政実務のノウハウを習得させるとともに、派遣元自治体と人的交流を深めることで、本県の国際化を図っている。

本年度は中国吉林省及び韓国江原道からの研修生を受け入れ、商工労働部及びその関係機関で研修を行った。

２．研修内容

厳しい経済環境の下、産業振興と雇用確保対策は本県政の取組みの中でも重要課題の１つである。また、鳥取県境港市と韓国・東海、ロシアウラジオストクを結ぶ環日本海定期貨客船航路の就航、ＧＴＩ（広域図們江開発計画）への参加など、北東アジア地域との経済交流に積極的に取り組んでいる。

このような状況の中、林暁琳研修員、金蘭姫研修員には、以下のとおり研修を行った。

<table>
<tr><th>日程</th><th>林暁琳研修員</th><th>金蘭姫研修員</th></tr>
<tr><td>７月</td><td>語学研修：日本語研修</td><td>市場開拓局：県産品の販路開拓支援、地産地消の推進等</td></tr>
<tr><td>８月</td><td rowspan="3">商工政策室：商工労働部の事業概要
経済通商総室：北東アジア地域との経済交流、貿易支援等</td><td rowspan="3">産業振興総室：農商工連携等の新事業開拓、省エネ等の環境産業振興、企業立地の推進、産学官の連携等</td></tr>
<tr><td>９月</td></tr>
<tr><td>10 月</td></tr>
<tr><td>11 月</td><td rowspan="4">産業振興総室：農商工連携等の新事業開拓、省エネ等の環境産業振興、企業立地の推進、産学官の連携等</td><td rowspan="3">商工政策室：商工労働部の事業概要
経済通商総室：北東アジア地域との経済交流、貿易支援等</td></tr>
<tr><td>12 月</td></tr>
<tr><td>１月</td></tr>
<tr><td>２月</td><td>雇用人材総室：労働施策、就業支援等</td></tr>
<tr><td>３月</td><td>経済通商総室：研修のまとめ</td><td>産業振興総室：研修のまとめ</td></tr>
</table>

３．事業実施に当たっての工夫、苦労したこと

林暁琳研修員には、県内、県外で開催された境港、環日本海貨客船航路の利用促進のための「境港利用促進懇話会 in 大阪」、雇用就業支援のための「とっとり・しまね企業ガイダンス」等の各種イベントに積極的に参加してもらい、日本の多くの企業等に触れてもらった。また、昨年１２月に鳥取県で開催された「北東アジアビジネスフォーラム」では、スタッフの１人としてイベント業務にも携わってもらうとともに、日本語能力のスキルアップを図るため、研修期間を通じ日本語の研修を実施した。

金蘭姫研修員には、県内、県外で開催された産業振興のための「鳥取産業フェスティバル2010＆鳥取環境ビジネス交流会2010」、環日本海貨客船航路の利用促進のための「江原道投資環境・環日本海貨客船航路説明会」等の各種イベントに積極的に参加してもらい、日本の多くの企業等に触れてもらった。また、鳥取県の伝統産業、食のみやこ鳥取県を体験してもらうとともに、経済分野に関連した韓国での新聞報道等を情報収集してもらうなどの業務にも携わってもらった。

林暁琳研修員、金蘭姫研修員ともに余暇の過ごし方として、他の国際交流員や研修員とともに食事に誘うことで、交流員、研修員と知り合うきっかけを与え、孤独を感じないように努めた。

また、両研修員は、持ち前の好奇心と人柄で言葉の壁を乗り越え、様々な分野の人たちと交流を行った。これは我々の努力ではなく、やはり自らの前向きな気持ち、そして様々なものを吸収するための努力を惜しまなかった本人の能力によるところが大きいと思われる。

４．成果・課題

林暁琳研修員、金蘭姫研修員ともに各部署での研修を積極的にこなし、様々な活動に参加した。なお、本県における研修の満足度は、研修員本人にゆだねたい。

帰国後は、本県と中国吉林省、韓国江原道との交流の架け橋となることを期待するとともに、我々もより一層、努力していきたい。

＜林暁琳研修員＞

県庁商工労働部での研修の様子

＜金蘭姫研修員＞

県庁商工労働部での研修の様子

鳥取しゃんしゃん祭りに参加

小学校人権フェスティバルに参加

International relation training course in Kitakyushu

Host institution: city of Kitakyushu
Name: Do Quang Minh
Country: Vietnam
Training Institution: Asian Affairs Division, City of Kitakyushu.

1. Introduction:

My name is Do Quang Minh, I work for the Department of Foreign Affair under Haiphong People Committee of Vietnam. The Department of Foreign Affair plays an important role on international exchange between Haiphong city and the government of Japan and other countries in the world, as well as private enterprises.

Haiphong, a port city is the third biggest city in Vietnam, located in the Northern of Vietnam. In which a number of Japanese industrial complexes are located.

Haiphong city and Kitakyushu city are two friendship cities; the Memorandum of Understanding was signed in April, 2009 by two cities' leader for 5 years and it will be re-evaluated in the fifth year to decide the form of future exchange activities based on the current situation. This is the second year, Haiphong People Committee decided to send the staff to Kitakyushu for training on international relation, environmental protection, trade promotion…and on behalf of a strong bridge between two cities.

This is my first time coming to Japan for studying and spending my experience and life in Kitakyushu.

2. General training:

2.1. TOKYO orientation (23rd May – 25th May, 2010):

Within 3 days staying in Tokyo, the welcome ceremony and orientation was held at the Japanese Ministry of Internal Affairs and Communications. We were touch about the Japanese political system and the status of various local governments and then visited some noted places.

Tokyo is very big, excited city and it was very wonderful to see all the city view from Tokyo tower. This wonderful scene will go with me for all my life.

2.2. Japanese Training at JIAM (26th May – 7th July):

I attended Japanese class for one and half month under enthusiastic and active guiding of the Japanese teachers from NGO Research Institute for Japanese Language Training. There, I was also introduced about the local authority system by officials from Ministry of Internal affairs and Communications; I also caught some understanding about the reality of Japanese Aging Society, Japanese traditional culture and history.

My Japanese training course was short time but it was a marvelous experiences with other friends beside a very nice the Lake Biwa.

2. 3. Specialized training (8th July – 30th October, 2010):

On 8th July, I left JIAM to Kitakyushu, a very famous city at rich experience on

environment and technology. Here in Kitakyushu, I was warmly welcomed by every one in Kitakyushu and began my training.

I was introduced about Kitakyushu city by reading newspaper, official staff and residents. And I was also been taken by helicopter to observer all the Kitakyushu view. This is my first time on helicopter, so I was very excited, the city of Kitakyushu in front of my eyes are very beautiful not only the high buildings but also vast natural areas, and Kanmon Strait was very nice when I visited there by ship.

My understanding of Kitakyushu city on international relation:

The city of Kitakyushu is an international city with approximately one million people and is located in the northern region of Kyushu Island by the Kanmon Strait. This city has 4 sister and friendship cities and has started new relationship with Haiphong city since 2009.

International Cooperation Activities

Kitakyushu is home to innumerable technologies and rich experience from its history in developing as an industrial and environmental city, and is carrying out substantive international cooperation activities through cooperation among the government, private sectors and universities.

JICA Kyushu International Center

The JICA Kyushu International Center was established as a comprehensive liaison office and international center to accept trainees for the Japan International Cooperation Agency in the Kyushu region. The center accepts over 700 trainees from developing countries per year and carries out diverse training courses, while promoting international cooperation in the local area with the cooperation of local residents.

Kitakyushu International Association

The Kitakyushu International Association (KIA) is promoting international exchange with residents and taking action to promote multi-cultural policies, focusing on providing support to foreigner residents, including the establishment of consultation services. Consultants that have overseas volunteer experience (JICA Coordinator for International Cooperation) have received requests for consultations on international cooperation by residents.

Local Businesses Promoting International Cooperation

The Wakamatsu Environment Research Institute, JPec Co., Ltd carries out research on design, construction and maintenance of thermal power stations, and the affective use of by-products, such as coal and ash (as construction materials, fertilizer, other), as well as conducting environmental analyses and environmental assessments. As one of its research topics, JPec studies composting technologies for organic waste management projects that are being carried out in the Southeast Asian region. A project implemented in Surabaya, Indonesia, in particular, has resulted in a major contribution to environmental protection of the city, including a reduction in the amount of waste,

improvements in environmental awareness of residents, and greening of the city through the application of composting technology for organic waste developed locally.

ベトナム語版市勢概要の完成を市長に報告

Beside of studying in Kitakyushu, I also suppoeted strongly in arrangement for official delegation from / to Haiphong. During my training in Kitakyushu, a journalist visited to Haiphong to report the city, and musician in Kitakyushu had their performance in Haiphong city, On behalf of their success and further relationship between two cities, I acted as a liaison with Haiphong city.

I introduced about Haiphong city to Japanese and some other foreigner countries when Kitakyushu International Association organized photos exhibition in their festivals. Since then, Haiphong has known as rich potential city for sustainable development about industry and environment. I also learnt a lot about Kitakyushu city through translating brochures of Kitakyushu from English version to Vietnamese version.

In Kitakyushu city, I met about 35 Vietnamese students and 30 JICA participants from Vietnam studying in Kitakyushu. We exchanged information and we are sure that we will be bridges between Kitakyushu and Vietnam.

2.4. Impression of training:

- Each section and department where I undertook training held meetings at least once a week with the aim of enhancing communication skills, strengthening solidarity and reconfirming work goals. These meeting were highly affective.
- Public officials work really hard and their attitude towards to their work is very diligent and meticulous. Kitakyushu official are very kind and well-mannered.
- I felt that there was a strong awareness of the need to protect the environment and obey the traffic rules.
- I was deeply impressed by the Japanese environment, kindness of Japanese people, conservation of natural resource, and recycling.

下水道工事現場視察

3. Conclusion:

The friendship between Haiphong city and Kitakyushu city began in 2009 but the relationship between two cities is getting better and getting succeeds at the beginning. My 5 months training on international relation and other relevant sections in Asia International Division was very useful and facilitated increasing my knowledge. After my training course as strong bridge between Haiphong city and Kitakyushu city, I will work with my best to increase the good relationship between two cities.

北九州市での国際関係研修コースに参加して

受入自治体　　北九州市
氏名　　ドゥ・クアン・ミン（**Do Quang Minh**）
出身国　　ベトナム
研修先　　北九州市アジア交流課

1.　自己紹介

私の名前はドゥ・クアン・ミンです。私はベトナムのハイフォン市（Haiphong）人民委員会の外務局（Department of Foreign Affair）に勤務しています。外務局はハイフォン市と日本その他の諸国の政府や民間企業との国際交流に関する重要な役割を担っています。港湾都市であるハイフォンは、ベトナム第三の都市で、ベトナム北部に位置しています。ハイフォンには日本の工業団地も数多くあります。

ハイフォン市と北九州市は友好協力協定を結んでいて、2009 年 4 月に両市の市長が５年間の友好関係を取り決めた覚書に署名しました。５年後には、現状に照らして今後の交流活動の形態を決定すべく再検討されることになっています。今年は友好協力協定の締結から２年目に当たり、ハイフォン市人民委員会は、国際関係、環境保護、貿易促進などに関する研修のため、そして、両都市間の強力な架け橋となるために、北九州に職員を派遣することを決定しました。北九州での勉強、体験、生活のために今回初めて日本を訪れることになりました。

2. 全体研修

2.1.　東京でのオリエンテーション（2010 年 5 月 23 日− 5 月 25 日）

東京に滞在した 3 日間に、日本の総務省での歓迎式典とオリエンテーションが開かれた。日本の政治制度とさまざまな地方自治体の状況について説明を受け、その後、名所を訪れた。

東京は活気あふれた大都市で、東京タワーから眺めた街の展望が素晴らしかった。あの景色は一生忘れられない。

2.2.　JIAM での日本語研修（5 月 26 日−7 月 7 日）

私は、1 ヶ月半、日本語クラスに参加し、NGO の日本語教育研究所の日本語教師の熱心で積極的な指導を受けた。そこでは、総務省の職員から地方自治体の仕組みも紹介された。また、日本の高齢化社会の現実や伝統文化と歴史についてもある程度理解することができた。

日本語研修コースの期間は短かったが、美しい琵琶湖のそばで他の仲間と共に過ごした素晴らしい体験だった。

2. 3. 専門研修　（7 月 8 日−10 月 30 日）

7 月 8 日、私は JIAM を後にして、環境・技術に関して豊富な経験がある有名な都市、北九州に着いた。北九州市ですべての方々から暖かい歓迎を受け、研修がスタートした。

私は、新聞を読み、職員や住民から聞き、北九州市に関する情報を得た。また、ヘリコプターで北九州全体を上空から眺める機会をつくっていただいた。ヘリコプターに乗るのは初めてでとても興奮した。目の前に広がる北九州の街はとても美しく、高いビルだけでなく、広大な自然が広がっていた。 船で訪ねた関門海峡も素晴らしかった.

北九州市の国際関係に関する私の理解

北九州市は約 100 万の人口をもつ国際都市で、関門海峡に面した九州北部に位置している。この都市には４つの姉妹都市、友好都市があり、ハイフォン市とは 2009 年に初めて関係を結んだ。

国際協力活動

北九州市は数多くの技術を生み出した本拠地であり、工業都市、環境都市として発展してきた歴史と豊かな経験がある。また、市当局、民間部門、および大学との間の協力によって多くの国際協力活動が実施されている。

JICA 九州国際センター

JICA 九州国際センターは、国際協力機構（JICA）の研修生を九州地方に受け入れるための総合的な連絡事務所兼国際センターとして設立された。同センターは、年間 700 名余の途上国の研修生を受け入れ、多様な訓練コースを実施するとともに、現地住民の協力を得て、地方における国際協力を推進している。

北九州国際交流協会

北九州国際交流協会（KIA）は、住民との国際交流を推進し、相談サービスの開設を含め､外国人居住者へのサポートに焦点を当てた多文化重視の政策の推進に取り組んでいる。海外でのボランティア経験があるコンサルタント（JICA 国際協力コーディネーター）が、住民の国際協力に関する相談を依頼されている。

国際協力を推進している当地域のビジネス

株式会社ジェイペック（JPec）の若松環境研究所が、火力発電所の設計・建設・メンテナンス、および石炭や灰などの副産物の効果的な利用（建設資材、肥料、その他として）に関する研究を行うとともに、環境分析、環境アセスメントを実施している。同研究所の研究テーマの一つとして、ジェイペックは、東南アジアで実施されている有機廃棄物管理プロジェクトのために堆肥化技術を研究している。特に、インドネシアのスラバヤで実施されているプロジェクトは、廃棄物量の減少、住民の環境意識の向上、現地で開発された有機廃棄物の堆肥化技術の応用による都市の緑化など、スラバヤ市の環境保護に大きく貢献した。

北九州での勉強の他に、私は、ハイフォン市からの公式代表団やハイフォン市を訪れる日本からの代表団のための手配をお手伝いした。北九州での研修期間中、新聞記者がハイフォン市について取材するためにハイフォン市を訪れたり、北九州の音楽家がハイフォン市で演奏したりする機会があった。彼らの成功と二都市間の関係の強化のために、私はハイフォン市との連絡窓口として行動した。

北九州国際交流協会がフェスティバルで写真展示会を開催した際、私は、日本やその他の

諸外国の人々にハイフォン市を紹介した。以来、ハイフォンは、産業や環境の持続的な発展の多大な可能性を秘めた都市として知られている。私はまた、北九州市のパンフレットを英語版からベトナム語版に翻訳したが、その過程で北九州市について多くを学んだ。
北九州市で、私は約 35 人のベトナム人学生と、ベトナムから来日し、この市で学んでいる 30 人の JICA 研修生と会った。情報を交換し合った私たちは、北九州とベトナムとの架け橋になると確信している。

2.4. 研修の感想

- 私が研修を受けた各セクションや部門は、コミュニケーション能力の向上、結束力の強化、作業目標の再確認のために、最低、１週間に１回ミーティングを開いていた。こうしたミーティングはとても有効である。
- 公務員が非常に一生懸命働いていて、仕事に対する彼らの姿勢はとても熱心で、細かな所まで行き届いている。北九州市の職員は大変親切で、礼儀正しい。
- 環境保護の必要性に対する認識が高く、交通ルールをよく守っていると感じた。
- 日本の環境、日本人の親切さ、自然資源の保護、リサイクルの実施に非常に感銘を受けた。

3. 結論

ハイフォン市と北九州市の友好関係は 2009 年に始まった。両市の関係は当初から好ましかったが、ますます良くなっている。アジア交流課における国際交流やその他の関連事項に関する私の 5 ヶ月間の研修は、非常に有益で、私の知識の向上に大きく役立った。ハイフォン市と北九州市との間の強力な架け橋になるためのこの研修コースの後、私は、両市の良好な関係の強化のために最善を尽くしたい。

平成２２年度　北九州市自治体職員協力交流事業について

自治体名	福岡県北九州市	
研修員名	①ドゥ・クアン・ミン	②姜　閏淑
出身国	ベトナム	大韓民国
研修分野	国際交流	消防
研修期間	６ヶ月	５ヶ月
主な研修先	企画文化局アジア交流課	消防訓練研修センター

研修員名	③史　磊	④マナシャン・マリア
出身国	中国	ロシア
研修分野	環境	国際経済交流支援
研修期間	5ヶ月	7ヶ月
主な研修先	環境局環境国際戦略課アジア低炭素化センター	産業経済局貿易振興課

１　背景・目的

北九州市では、平成８年度から自治体職員協力交流事業を活用して、アジアを中心とした海外の自治体等の職員を研修員として受け入れ、研修を通じた海外とのネットワーク構築や市職員の国際感覚の向上などにより、本市の国際化推進に大いに役立っているところである。（平成８～２２年度、１２カ国、５２名）

受け入れる研修分野は、一般行政、環境、消防など幅広い分野にわたっており、派遣国・自治体からも地方行政に携わる職員の育成に貢献するプログラムとして高く評価されている。

２　事業実施にあたっての工夫、苦労したこと

＜研修員①＞

・国際交流業務、環境施策の説明、市勢概要のベトナム語版作成等の業務を行った。

・日本語能力が専門的な説明にも対応できるレベルには至らなかったので、研修を含め英語での意思疎通が中心になったことが課題といえるが、友好交流協定を結んだ都市からの研修生だったので、両市の交流事業もより進展した。

「市勢概要翻訳」の新聞取材の様子

＜研修員②＞

・他都市の消防局（京都市消防局、長崎市消防局等）を視察し、各都市の地域特性に応じた独自の取り組み等を学ばせるとともに、多くの消防関係者との交流を図る機会を設けた。

「救急の日」広報活動

・消防署における市民指導等の実務を学ぶため、２つの消防署において約３週間の実務研修を実施した。

＜研修員③＞

・JICA カリキュラム『廃棄物管理技術と環境教育』（循環型社会構築（概論、法令と仕組み、省エネと企業の役割）、コンポスト試作講義・演習、産業廃棄物管理、地方自治体環境行政概論・国際協力、一般廃棄物管理計画、一般廃棄物管理運営、家畜廃棄物の堆肥化・検査方法、地域社会での環境教育、自然回復技術と実践）の参加、北九州エコタウン、北九州市内企業の視察、高校生への大連市環境政策の紹介などの研修を実施。

・日本と中国では大規模プロジェクトに対する行政の係わり方が大きく異なる。日本側が抱いている当事者意識や問題などを理解して貰うのに時間がかかった。

リサイクル工場視察

製鐵所視察

＜研修員④＞

・　現在ロシアとのビジネスを進めている、企業を中心に、企業訪問を実施。ロシアとのビジネスの現状をヒアリングし、今後の進め方などについても、意見交換を行った。

・日本側の企業との意見交換を行うことで、帰国後の北九州市とチェリャビンスク市の経済協力協定締結後の実務に役立つ情報を得ることに重点を置いて研修を行った。

・　また、本市の強みである「環境分野」に関する産業についての理解を深めるため、「北九州エコタウン」の視察、環境分野に係る企業訪問を積極的に行った。

・　研修期間中にロシアからの訪問団の来日が２度ほど重なり、受入れ側の実務についても研修の機会を得ることができた。

・　気候、慣習の違いによる体調不良が多々見受けられ、健康管理に気をつかった。

産業経済局貿易振興課事務所にて

タタールスタン共和国ミッション団受入れサポート

3　成果・課題

＜研修員①＞

派遣元自治体と本市は友好・協力関係に関する交流協定を結んでおり、両市の架け橋となる人材が増えたことが大きな成果である。今後も本事業を活用し、様々な分野で協力を進めていきたい。

＜研修員②＞

研修員が消防業務全般に触れられるよう、本研修を実務研修として実施した結果、様々な知識や技術が得られたと考え、帰国後における技術移転がかなり期待される。

＜研修員③＞

本市において、研修だけでなく、地域の行事にも積極的に参加をして、日本の文化や風習などを理解して貰えた。帰国後は、本市と大連市環境保護局との架け橋として活躍してもらいたい。特に、本市が協力をした『大連生態工業モデル園区』経済産業省事業）は平成 23 年 3 月で終了をするが、本プロジェクトは長期間に渡ること事から、引き続きプロジェクト成功の為に努力してもらいたい。

＜研修員④＞

本事業によって、当市と経済・文化交流が進展中であるロシア連邦・チェリャビンスク州、チェリャビンスク市から研修員を受け入れることができたことで、当地域とのビジネスを行っている企業、またこれから始める企業にとって、ビジネス支援の窓口を得たこと、また顔の見える関係を構築することができたことは今後のビジネス展開を促進するものとなった。

また、当地域が高い関心をもつ当市の環境分野に関する産業の理解を深めてもらったことで、新たなビジネス展開の可能性も広がった。今後も本市について、また本市の企業や環境産業分野の知識を持った、人材を育成していくことで、両地域のビジネスに関する支援体制の強化に繋がることを期待している。

CLAIR